

バトルスピリッツ Sky Load

メガイラ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

バトルスピリッツが世界的に広まっているとある世界。そこにはとあるゲームが存在していた。

『バトルスピリッツオンライン』——通称『BS・O』  
VRを駆使し、ゲーム空間内で実際にスピリット達が目の前で動いて戦うこのゲームはたちまち大流行した。

これは、そんな世界で戦う者達の物語——

目次

プロローグ	1
2色の荒神	11
双頭の凶獣	32
その名は化神（ゴツド）	52
創界神（グランウォーカー） VS 創界神（グランウォーカー）	87
妖魔の夜行	120

## プロローグ

『さあ、試合も終盤！ ナツカゼのスピリットのアタックによりライフはお互いに2つの状況でチャレンジヤーのターンだああ!!』

あるスタジアムで司会者らしき人物の声が流れると同時に、観戦者達の声援が上がる。そんな彼らの視線は、スタジアムの中心で対する2人に注がれていた。

——1人は黄色やピンク等ファンシーでカラフルなワンピースを着た少女。髪や顔にも服に合わせたアクセサリーやペイントで着飾っている。

そんな彼女の目の前には何枚ものカードが宙に浮いており、その更に先には水色の大きな猫に自身の身の丈と同じスプーンとナイフを持った美しい妖精、そして銀色の鎧馬に跨がる騎士が立っている。

——もう1人は少女の服とは対照的に、白と赤でシンプルに纏められた着物を着ている銀色の長髪を持つ女性である。少女と比べると淡白な外見であるが、凜とした佇まいは不思議と人を惹き付けている。

その女性の前には機械的な見た目をした3体の鎧武者がいる。その内の1体で1番の巨体を持つ2本角の鎧武者は疲れてるのか膝を付いており、その左右には刀を手にする赤い鎧と、薙刀を構える紫の袴を着た2体の鎧武者達が空中で漂っており、更に白い文字で『BS』と書かれた黒いカードが伏せられている。

これは『バトルスピリッツ』、『スピリット』と呼ばれているモンスター達を召喚し、指示して戦わせるカードゲームだ。

「いっくよおお！ メインステップ!!」

まずは君、『三月幼神マチルス・キッズ』召喚！」

少女——チャレンジャーが手に持つカードの1枚を黒色の台に置いた。すると大きな猫の隣に丸い黄色のシンボルが現れ、それが砕けるとサンゴの様な装飾をした黄色のロボットがフィールドに立った。

「マチルス・キッツの召喚時効果！」

デッキを上から4枚オープン！ その中から煌臨を持つ黄色のスピリットカードを1枚手札に加えるよ！」

台上に置かれた山札から4枚のカードが自動的に浮き上がって表側にめくられる。その中の1枚を見たチャレンジャーは歓喜の声を上げた。

「やったあ！ あたしはこの『ジークフリード・マッドハッター』を手札に加えて、残ったカードはデッキの下に！」

チャレンジャーが選択したカードは彼女の手札に加わり、残されたカード達はデッキの下に送られた。そして——

「更にあたしはマチルス・キッツのもう1つの効果を使うわ！」

マチルス・キッツがサンゴに似た杖を振るうと、チャレンジャーが新たに加えたカードが光りだした。

「1ターンに1度だけ、メインステップで黄色のスピリットカードを煌臨できる！」

来て、あたしのキースピリット！ 『不思議王ワンダーキングジークフリード・マッドハッター』！ ホワイトナイトジャックに煌臨ッ！」

チャレンジャーの声と共に何処からともなく大量のランプが現れ、白銀の騎士——ホワイトナイトジャックの周りを囲み始める。その後、ランプが吹き飛ばされ、ホワイトナイトジャックがいた場所

には黄色の独特な帽子を被り、トランプのマークが刺繍された服を着た龍が立っていた。

『な、なあああんとおお!!? 本来アタックステップでない煌臨できないマッドハッターが、メインステップで煌臨したああああ!!』

「……………」

司会者の驚きの声と観客達がどよめく中、対戦相手のナツカゼはただ静かに相手のスピリットを眺めていた。

「更にマッドハッターをレベル3にアップ！　そして行くよ、アタックステップ！

ジークフリード・マッドハッターで、アタック!!」

チャレンジャーの指示を受け、マッドハッターは地面を蹴り鎧武者達がいるフィールドへ駆け出した。

「マッドハッターのアタック時効果！

手札かフィールドにある「アクセル」を持つカードをコストを支払わずに使えるわ！　あたしは手札から『不思議王国トランプ・グリフォン』のアクセルを使用して、系統「四道」を持つスピリット全てに『相手によつて破壊された時、疲労状態でフィールドに残る』効果を与える！」

チャレンジャーの手札にあった1枚のカードが光り、その輝きはマッドハッターと大きな猫に新たな力を与えた。そして使い終わったカードはチャレンジャーの前にあるカード達と同じ様に展開された。

「そして、この効果でアクセルを發揮したのでマッドハッターは回復

！」

マッドハッターが勢いよく迫って来るが、ナツカゼは動じる事なく見据えていた。

「更にエクレア・シフォン、レベル2の効果でマジックをノーコストで使う事ができるの。」

よってフラッシュユタイミング！ マジック『神閃月下（RV）』！」

相手が何もしてこないのを確認したチャレンジャーは、手札にあるカードの1枚を使用した。すると突如フィールドに満月が現れ、その満月の光を浴びた鎧武者達の身体が痺れ始めた。

『あぁつと！ 「神閃月下」の効果によりナツカゼのスピリット達が動けなくなってしまうたぁぁぁぁ!!』

『神閃月下（RV）』はこのターンの間、黄色以外のスピリットはアタックとブロックができなくなる効果を持つマジックカードである。ナツカゼ率いる鎧武者達は白1色のスピリット。対してチャレンジャーのフィールドにいるスピリットは全て黄色1色。すなわち、ナツカゼのスピリットだけが『神閃月下』の影響を受けてしまうのだ。

——ブロックが不可能となった以上、ナツカゼに勝ち目は無い

スタジアムにいる者達が皆、チャレンジャーの勝利だと確信した。

——そう思った時だった。

「——フラッシュタイミング。」

「——ッ!!」

「マジック、『白晶防壁』を使用。使用コアは全て疲労状態のコンゴウより確保。よってコンゴウのレベルは2へとダウン。そしてマジックの効果により、チェシャーキャットを手札に。」

ナツカゼのマジックカードから白い衝撃波が放たれ、その衝撃波を受けた水色の大きな猫——チェシャーキャットはチャレンジャーの手札に戻されてしまった。それと同時に、ナツカゼのフィールドにいる鎧武者の1つ——コンゴウは力を失ったかのようにさらなる疲労感を見せた。

「更に、マジック使用コストにソウルコアも使用したのでこのターン、私のライフは1つしか破壊できなくなります。」

「くッ……。なら別のプランに変更するまでよ!」

自身のマジックが無駄になった事実をチャレンジャーは悔むが、彼女は既に別の作戦を用意していたのだ。

「フラッシュタイミング!」

マッドハッターのアタック時効果、【煌革命】発動!!」

マッドハッターが右手を掲げる。するとチャレンジャーの手札と手元にあるカードの内、4枚がマッドハッターの元へと集まってくる。そして、そのカードが消滅するとナツカゼの周りが黄色い光を纏い出した。



「マッドハッターの【煌革命】は、手札と手元にある系統「古竜」もしくは「四道」を持つ同じコストのスピリットカードを4枚破棄することで発動できる。その効果は次の【煌革命】まで相手のリフレッシュステップとアタックステップを入れ替える効果！　つまりあなたのデカブツは次のターンアタックできないってこと！　そしてマッドハッターの攻撃は終わってないよ！」

「そのアタックはライフで受けます。——　——　ツツ!!」

ジークフリード・マッドハッターは両手から光弾を作り出し、それをフウカに解き放った。その光弾はナツカゼの前に現れた水色の結晶体——ライフの1つを撃ち砕いた。

「これであたしは——「まだ終わるのは早いわ。」——　——　え?」

「ライフ減少により、バースト発動ツ！」

ナツカゼの声に呼応し、フィールドに伏せられていたカードが竜の姿を模した炎を纏いながら上空へと舞い上がり、竜の瞳に似た炎の球体へと変貌してゆく。

「龍皇の名を冠する武竜よ！　魂に炎を纏わせ、天下無双の力を世に知らしめす時！」

『戦国龍皇バーニング・ソウルドラゴン』、レベル3でバースト召喚ツ!!』

炎を吹き飛ばして現れたのは、赤い和風の鎧を身に着け、2本の槍を手にした竜人だった。

『つ、遂に出たあああああああツツ！　ナツカゼのエーススピ

リットの1体、バーニング・ソウルドラゴンだ  
あああああああツツ!!』

華麗に着地したバーニング・ソウルドラゴンが力強く咆える。歴戦の猛者と思わせるその姿に、観客達は息をする事も忘れて見惚れていた。

「バーニング・ソウルドラゴンは私のライフが3以下の時にバースト召喚が可能となり、その時、トラッシュのコアを全て自身に置く効果を持つ。よってバーニング・ソウルドラゴンはレベル4へとアップ！」

スピリット達にとって力の源であるコアが更に追加されたバーニング・ソウルドラゴンは、槍を繋ぎ合わせて増大したパワーを見せつけるかのように振り回し、その切っ先を相手スピリット達へと向けた。

「ツう——、ターン、エンド……。」

バーニング・ソウルドラゴンの覇気に押されたのか、チャレンジャーは声を振るわせながら自身のターンを終える宣言をした。

「スタートステップ、コアステップ、ドローステップ、そして【煌革命】の効果によりアタックステップへ。

バーニング・ソウルドラゴン、貴方のアタックでこのバトルを終わらせましょう。出陣ツ!!」

主からアタックの指示が下り、バーニング・ソウルドラゴンは敵陣に突入する。

「ど、どれだけ強いスピリットでも、あたしのフィールドには3体ブ

ロッカーがいるわ！ 全員でアタックしてきてもブロックすればライフは守れ——」

「いいえ。貴女に次のターンはなく、また2回目のアタックもありません。バーニング・ソウルドラゴンツ！ 貴方自身の魂を捧げて、秘伝の奥義を發揮しなさいッ!!」

バーニング・ソウルドラゴンが槍を豪快に振るうと炎が勢いよく放たれ、その炎はマッドハッターとマチルス・キッズに命中する。すると、マッドハッターとマチルス・キッズの身体が赤い光に覆われたかと思えば、2体は急に動き出しバーニング・ソウルドラゴンへ同時にバトルを挑んだのだ。

「えッ!? ええッツッ!!?!」

自分は指示を出してもいないのに勝手に行動したスピリット達に困惑するチャレンジャーだが、フィールドの状況は止まる事はない。

まずマチルス・キッズが果敢に杖で殴ろうとするが、体格差に物を言わせたバーニング・ソウルドラゴンの正拳突きで簡単に倒されてしまう。

続けてマッドハッターがトランプカードを手裏剣の如く投げて攻撃するが、バーニング・ソウルドラゴンの口から放った炎のプレスでトランプは全て燃やされてしまう。圧倒的な力の差を思い知らされ後退りするマッドハッターに、バーニング・ソウルドラゴンは一気に距離を詰めて槍を突き刺す。致命的な一撃を受けたマッドハッターは弱々しい声を上げながら爆発した。

「う、嘘、でしょ……。」

「バーニング・ソウルドラゴンは、このバトルで勝利した数だけ相手のライフを破壊できる。勝利した数は2——よって貴女の残る2つの

ライフを全て破壊します。」

キースピリットが破壊されたショックを受けるチャレンジャーに  
ナツカゼは無慈悲な宣告を言い放つ。その言葉を待っていたかの様  
に爆煙の中から飛び出したバーニング・ソウルドラゴンはチャレン  
ジャーの目の前に迫り、現れた2つのライフをその槍で斬り裂いた――



「……………」

「——オイ。」

『バトル終了おおおおおおおおおおおおツツ!!! 勝者はナツカゼ  
だアアアアツツ!!』

「……………」

「……………オイ。」

『「白晶防壁」でライフを守り、エーススピリットの召喚、まるで最初  
から【煌革命】が来るのを読んでいたかの様な鮮やかなプレイングで  
見事な——』

「聞こえてんのかレン!!」

「——うん? どうした?」

『レン』と呼ばれた青年は動画を止めて、携帯の画面から目の前で座っている幼なじみに視線を移した。

『どうした？』じゃねえよ！ 俺の夏休みの宿題を早く片付けろ！  
なんで途中から動画見てんだよ！ タダ飯食わせる為にファミレスに連れてきたんじゃねえぞ!!」

「いやお前の宿題、渡された分はもう終わったし、暇だったし……。」

「だったら残りも手伝えよ！」

「ええ、面倒くせえ。」

「なあ……。俺たち、友達だよな？」

「人が気持ちよく寝てた時に急に叩き起こす奴を友達と思いたくないんだけど……。」

「いいから早く！ 初日に全部終わらせて後の休みをゲームに費やすためにも！」

「ハア……。わかったよ……。」

文句を言いながらもレンは幼なじみの頼みに応じ、彼の宿題を手伝うのだった。

## 2色の荒神

「はあく終わった終わった。ホントト助かったぜ、レン。」

「手伝った分奢ってくれたから気にするな——と言いたいけど、いずれ叩き起こしに行くから覚悟してろよ。」

「寝てたところを無理やり起こしたのまだ根に持ってたのかお前……。」

丁度正午を過ぎた頃。何処にでもある住宅街で2人の青年が並んで歩いてた。2人の名は『雨風あまなぎ レン』と『神崎こうさき ジュン』。同じ年で同じ高校に通うごく普通の一般人だ

「ところでレン。帰ったら『B.S. O』に入るのか？」

『B.S. O』——バトルスピリッツ・オンラインの略称で、簡単に言ってしまうえばオンラインゲームである。VRを駆使したゲーム空間内に意識を移し、その中でバトルスピを行うゲームだ。

「うん。アップデートはもう終わってるだろうし、帰って飯とかの準備が終わったらログインするつもり。」

「それじゃあB.S. O内で合流するか。集合場所はいつも通り噴水がある広場でいいな？」

「了解、じゃあまた。」

そう言ってレンとジュンは手を振りながら自分の家へ帰った。



「ただいま。」

「あ、レン兄にい、おかえり〜。」

家に帰ってきたレンがリビングへ向かうと、机に突っ伏しながらスマホをいじる少女がいた。

彼女は『雨風 ヒカリ』。レンの妹である。

「何してんの?。」

「BS. Oのアップデートされた情報の確認。新しく追加されたクエストとか報酬のカードとか、色々。今から友達と攻略するから!。」

「お前もジュンも、それぐらい勉強も頑張つて欲しいもんだ……。」

「え〜。」と文句を言うヒカリを余所に、レンは冷蔵庫の前に立ち中を確認し始める。

「晩飯、適当に作つとくぞ。どうせ長時間ログインするんだろ?。」

「勿論、レン兄ありがとう!。じゃ、私は先にログインするから!。」

そう言い、ヒカリは自分の部屋へと戻っていった。

「まったく、世話のかかる妹だ。」

愚痴を言いながらも、笑みを浮かべながらレンはヒカリの晩ご飯を作り、自身もゲームにログインする為に自室へ向かった。



「……。……、よし、問題ないな。」

ゲーム空間内でレンは目を開け、直ぐにアバターが自身の意思にそって動いているかと、服装が前回ログアウトしたままの服装であるかを確認した。因みに肝心の服装だが、上から笠、胴着、帯に袴といった和風の出で立ちである。

自分の身体が問題ない事を確認したレンは辺りを見渡す。そこには様々な見た目をしたゲームアバター達が何人も街中を歩いており、プレイヤー同士で会話したり、色んな店に入ったり出てきたりと皆がそれぞれで楽しんでいた。

「さて、そろそろ——」

「ちよっと返してよ！」

「うん？」

集合場所へ向かおうと時、女の子の声が聞こえてきた。レンは声のした方を見ると、そこには女の子と男の子に、少し老けているガラが悪そうな見た目をした男の3人がいた。

「何言ってやがる。勝った方は負けた奴のデッキを渡すのが賭けだっただらう？」



「ふざけないで！ 弟は今日このゲーム始めたばかりだし、バトスピも初心者なのよ！ なのに私がない間に不当な賭けバトルをしてくるなんて——」

「ね、姉ちゃん……。でも、負けたのは事実で——」

「そんな事言っていないの!? セツかく手に入れたレアカードを奪われて本当にいいの!? 私は絶対に思わない！」

「あんだ！ 弟のデツキを賭けて勝負よ！」

女の子は自分のデツキを取り出し、男に勝負を申し込んだ。が、男は余裕を笑みを浮かべながら言った。

「ハッ、じゃあお前はここのデツキと対等な物を賭ける事になるが、一体何を賭けるつもりだ？ お前のデツキか？」

「そ、それは……。」

（私のデツキのレア度は低い。そもそもあいつにしてみればわざわざ勝負に应じる必要が……）

「俺と戦え。」——「え？」

女の子が後ろを振り向くと、そこには先程まで静観していたレンがデツキを掲げながら立っていた。

「なッ!? テメエ、何者——俺に勝ったら俺のデツキをやろう。ただし、俺が勝ったら彼のデツキは返してもらおう。それで良いな？」——「良くねえわ！ なんて話しを勝手に進めてるんだよ!？」

「どうした？ 負けるのが怖いのか、オッサン。」

「オ!? 俺はオッサンじゃねえ、まだ14だ！ アバターがオッサン

みたいな見た目だけだ！」

「なんだ、年下だったのか。なら年上には敬意を払う必要があるってお母さんから教わらなかったのか？」

「バ、バカにしゃがって！ いいだろう。その鼻を明かしてやる！」

男はレンの挑発に乗せられバトルを受理した。

「あ、あんた！ これは私達の問題なのよ!? なのに自分のデッキを賭けてまでどうして!？」

女の子はレンに詰め寄る。そんな彼女に対し、レンは笑いながら言う。

「気にするな。これは俺がやりたくてやってるんだ。後、俺の名前は『あんた』じゃない。俺のプレイヤーネームは『アマト』だ。」

レン——否、アマトと男は互いを見据え同時にある言葉を叫んだ。

「二ゲートオープン、解放!!」

すると2人の前の空間が裂けて光のゲートが現れる。彼らはそのゲートに迷う事なく飛び込んだ。そしてゲートに入った2人が辿り着いたのは荒野に似た地面が広がる丸いフィールドだった。

『だ、大丈夫なのかな？ あの人。』

『そんなの、私に聞かれても……。』

フィールドの上空にあの姉弟達が映る映像が現れる。スタジアム

ではない場所でのバトルでの観戦はこの様な形でできるのだ。  
そんな彼女達はアマトの実力を知らないので不安を抱いていた。

「先攻後攻はバトルを申し込まれた方が決める。だからお前が決める。」

「言われなくてもわかってる！ 俺が先攻だ！

スタートステップ！

ドローステップ！（手札4↓5）

メインステップ！ まずは『ブレイドラX』<sup>テン</sup>を召喚！

（手札5↓4 リザーブ4↓3）

ブレイドラX

【レベル1 BP1000 コア1「ソウルコア」】

フィールドに赤のシンボルが現れ、それが砕けると黄色い羽毛に覆われ、小さな翼を持った小型の竜が召喚された。

「次に『煌星<sup>こうせいだいごしと</sup>第五使徒テテイス』を召喚する！

（手札4↓3 リザーブ3↓0）

煌星第五使徒 テテイス

【レベル1 BP3000 コア1】

次に現れたのは水色の鎧を纏った赤い竜人が召喚される。そのスピリットを見た女の子は声を荒げた。

『ちよ、ちよつとそれ、弟のデツキじゃない！』

「今は俺のデツキだ！ あいつより俺の方が使いこなせれる事を見せてやる。ターンエンド！」

悪びれる様子を見せず男は最初のターンを終えた。

「俺のターン。スタート——『なーに遊んでんだアマト!!』——スワツツと!? って、ステイール!?」

いきなり声を掛けられ驚いたアマトが目にしたのは上半身を露出し、白いズボンを着た男が映っている映像だった。

彼の名は『ステイール』。リアルでアマトの友人であるジュンのアバター名だ。

『つたく。何やら面白そうな事をやってると思って見れば、その渦中にお前がいるとはな……。』

「あー、そのー。……ゴメン。」

『ま、だいたい事情は察してるから、さっさと終わらせろよ。』

「ああ、わかってるさ。——ンンツ! スタートステップ!」

アマトは咳払いし、改めて自分のターンを開始する。

「コアステップ。(リザーブ4↓5)

ドローステップ。(手札4↓5)

メインステップ。ネクサス、『スサノヲの轟天神殿』を配置!

(手札5↓4 リザーブ5↓1)」

アマトが舞台上に1枚のカードを置いた瞬間、フィールドに変化が訪れる。

アマト側のフィールドの地面が人工物でできた物に変わり、アマトの背後には巨大な社が何処からともなく現れたのだ。

「なツ!? なんだあれは!」

『これが、ネクサス……。』

『神殿のネクサス!? も、もしかしてあの人——。』

『お? 嬢ちゃんは察したみたいだな。』

配置されたネクサスを見た4人は色んな反応を見せる中、アマトは続けて手札のカードを1枚抜き取った。

『『スサノヲの轟天神殿』には赤と青のシンボルがある。よって軽減を全て満たし、ソウルコアでコストを支払い、グランウォーカー創界神ネクサス『創界神 スサノヲ』を配置する!』  
〔リザーブ1↓0 手札4↓3〕

アマトの背後に今度は光が集まり出し、その光は人の形を成している。  
く。

そうして顕現したのは金色の鎧を身に着け、大きな剣と刀を持つ筋肉質な肉体の大男だった。

「グ、グラン、ウォーカーだと……!?!」

『『グランウォーカー』、ってなんなの姉ちゃん?』

『え!?! ええつと……。』

『ああ、まあ簡単に言えばバトスピの世界の神様だよ。』

『神様……。』

フィールドに降り立ったスサノヲは不適な笑みを浮かべ、相手

フィールドにいる2体のスピリット達を見下ろす。その威圧感に相手スピリット達は怯え出す。

「俺のフィールドに同名の創界神ネクサスが無いため、配置時の神託コアチャージを行う。俺のデッキを上から3枚トラッシュに。」

スサノヲが手をかざすとアマトのデッキから3枚トラッシュに置かれる。トラッシュに置かれたカードは以下の3枚だった。

かぶとりゆう  
兜竜。パキケロウ

【コスト5 系統「地竜」】

ゴッドシーカー パラサノカンナギ

【コスト3 系統「地竜」】

がいようさい  
鎧要塞バロザウルヌシ

【コスト6 系統「地竜」】

「その中にスサノヲの神託対象となるコスト3以上の系統「地竜」、「海首」、「天渡」、「化神」を持つカードがあれば、1枚につきスサノヲにコアを1つ置く。今回は全てコスト3以上の系統「地竜」を持つスピリットだったのでコアを3チャージ！

(スサノヲ0↓3)

これでターンエンドだ。」

アマトはこのターン、スピリットを出さずにネクサスを配置するだけに留めた。その為彼のフィールドはがら空きも当然だが、男の顔には創界神を見たせいか少し焦っていた。

「お、俺のターン。スタートステップ。

コアステップ。(リザーブ0↓1)

ドローステップ。(手札3↓4)

リフレッシュステップ。(リザーブ1↓3)

メインステップ、『ブレイドラX』をもう1体召喚！

(手札4↓3 リザーブ3↓2)

そしてネクサス『百識の谷』を配置。

(手札3↓2 リザーブ2↓0)「

ブレイドラX

【レベル1 B P 1000 コア1】

男は2体目のブレイドラXを召喚し、更に彼の後ろに巨大な谷が現れる。ドローを強化する効果を持つネクサスである。

「(あいつ、創界神使いだったのかよ。だがあいつのフィールドにはスピリットは居ねえ。なら今の内に叩く!)」

アタックステップ! テティスでアタック! アタック時効果でワンドロー!

(手札2↓3)「

テティスが飛翔し、アマトのライフを狙って真っ直ぐに突っ込んで行く。

「ライフで受ける! ——ッ!!

(ライフ5↓4)「

「続けてブレイドラXでアタック!」

「これもライフで受ける!

(ライフ4↓3)「

「ターンエンド!」

1体のブレイドラのアタックもライフで受け、このターン、アマトのライフは2つ削られてしまった。

『ちよ、ちよつと!? ライフが2つ破壊されてるじゃないの!』

『落ち着けよ。何事も下準備が重要だ。あいつからすればライフが減ってからが本番だ。』

女の子がキレ気味にステイールに言い寄るが、ステイールは余裕の表情をしていた。

「スタートステップ。

コアステップ。(リザーブ2↓3)

ドローステップ。(手札3↓4)

リフレッシュステップ。(リザーブ3↓8)

メインステップ。バーストをセット!

(手札4↓3)

次にマジック、『護国ノ威光』を使用! デツキから3枚ドロし、その後、系統「地竜」、「海首」を持つスピリットカード1枚か、それ以外の3枚を破棄する。俺は「地竜」を持つカード、『兜竜パキケロウ』を破棄する。

(リザーブ8↓7 手札3↓4)

そして『デイモルフオノスケ』を召喚!

(リザーブ7↓5 手札4↓3)

デイモルフオノスケ

【レベル1 B P 3 0 0 0 コア1 「ソウルコア」】

アマトのフィールドに召喚されたのは緑色の体色に鎧を身に着けている翼竜の様なスピリットだ。

「デイモルフオノスケはコスト3の「地竜」、よってスサノヲに神託!(スサノヲ3↓4)

そして召喚時効果発揮! 相手のネクサスを1つ破壊!」



デイモルフオノスケが口から火球を放つ。その火球は一直線に飛んでいき、『百識の谷』を燃やし尽くした。

「くツ、ネクサス破壊か！」

「更に、俺のフィールドに青のシンボルがあるので【連鎖<sup>ラッシュ</sup>】発揮！ ボイドからコアを1つ、デイモルフオノスケに追加する。

（デイモルフオノスケ1↓2）」

『スサノヲの轟天神殿』とスサノヲから青い光が放たれる。その光は、デイモルフオノスケにさらなる力を与えてコアを増やした。

『1回の効果で相手のネクサス破壊だけでなく、召喚に使われたコアも実質無かった事にしたの!?!』

「まだいくぞ。デイモルフオノスケに追加されたコアを使い『地爪竜<sup>ちそうりゆう</sup>エルリコシヨウ』をレベル2で召喚！ コスト4の「地竜」が召喚されたので再びスサノヲに神託！ これでスサノヲはレベル2にアツプする！

（リザーブ5↓3    デイモルフオノスケ2↓1    手札3↓2    スサノヲ4↓5）

そしてエルリコシヨウをもう1体レベル2で召喚。更にスサノヲに神託！

（リザーブ3↓0    手札2↓1    スサノヲ5↓6）」

地爪竜エルリコシヨウ

【レベル2    BP5000    コア2】

地爪竜エルリコシヨウ

【レベル2    BP4000    コア2】

次にアマトが召喚したのは細長い爪が生えた小型の恐竜だ。そのエルリコシヨウ達が召喚された事で、コアが5つ以上乗ったスサノヲから強力なオーラが放たれ始める。

「アタックスステップ！ この時、エルリコシヨウのレベル2の効果を発揮！ 自分のアタックスステップ、系統「地竜」、「海首」を持つスピリット達のBPを3000アップする！ レベル2のエルリコシヨウが2体いるので合計6000アップだ！」

エルリコシヨウ達が遠吠えをするとアマトのスピリット達が赤く光り出し力強く咆える。

デイモルフオノスケ【BP3000↓9000】

エルリコシヨウ（レベル2）【BP5000↓11000】

エルリコシヨウ（レベル2）【BP5000↓11000】

「エルリコシヨウでアタック！ エルリコシヨウのアタック時効果によりデツキから1枚ドロ！」

（手札1↓2）

アマトが指示を出すと、1体のエルリコシヨウが勢い良く走り出す。

「ライフで受ける！ ——グヴツ!!」

（ライフ5↓4 リザーブ1↓2）

エルリコシヨウがその長い爪で相手のライフを引き裂く。

「もう1体のエルリコシヨウでアタック！ アタック時効果で更にドロ！」

（手札2↓3）

「まだ来るかッ！ ブレイドラX、ブロックしろ！」

続けて別個体のエルリコシヨウがアタックするが、ブレイドラXが

立ち塞がる。しかし素のBPですら劣るブレイドラでは勝ち目はなかった。エルリコシヨウはすれ違いざまに自身の爪でブレイドラXを切り裂いた。

「へっ。ライフを守る時は守るもんだぜ?」

「それはどうかな?」

「……何?」

「この瞬間、スサノヲのレベル2の神<sup>グランフィールド</sup>域の効果を発揮!「地竜」、「海首」を持つ自分のスピリットがブロックされたバトルの終了後、相手のライフを1つリザーブに置く!」

「なっ!?!」

スサノヲが剣をゆっくりと持ち上げ、豪快に振り下ろす。その勢いで衝撃波が生まれ、男のライフを1つ破壊した。

「グアああツツ!!」

(ライフ4↓3 リザーブ2↓3)

『凄い、ブロックされてもライフを削った!』

『アマトって人のフィールドにはあとスピリットが1体いる。これならライフを更に1つ——「これでターンエンド。」』

——って、え? アタックしないの?』

『次のターンに備えたんだよ。デイモルフォノスケでアタックしてもライフを全て削り切るのはいできない。なら相手に少しでもコアを増やさないで置くのが懸命だ。』

ライフは破壊されれば、次以降に使えるコアとなる。つまりライフが減れば減るほど使えるコアが多くなるのだ。

「クソッ！ スタートステップ。」

コアステップ。(リザーブ3↓4)

ドローステップ。(手札3↓4)

リフレッシュステップ。(リザーブ4↓6)

メインステップ。よくもやりやがったな。だが、コイツらが来た時点で俺の勝ちだ！ 俺のライフを1つトラッシュに置く！ ツツウ！！ ——こ、これで、手札にあるコイツをコスト3として扱って召喚する！ 『黒皇龍<sup>こくおうりゆう</sup>ダークヴルム』ッ！  
(ライフ3↓2 手札4↓3 リザーブ6↓4)「

フィールドの空が暗雲に包まれ、その暗雲から黒い雷が落ち大地を抉る。その割れ目から現れたのは悪魔の様な角を持つ黒いドラゴンだった。

黒皇龍<sup>こくおうりゆう</sup>ダークヴルム

【レベル1 BP4000 コア1】

「そしてこのカードのコストは俺のライフと同じ数になる！ 来いッ！ 『雷皇龍<sup>らいおうりゆう</sup>ジークヴルム (RV)』ッ！  
(手札3↓2 リザーブ4↓1)「

男の背後からゆっくりと赤い竜——ジークヴルムが姿を現しフィールドへ降り立つ。

雷皇龍<sup>らいおうりゆう</sup>ジークヴルム (RV)

【レベル2 BP7000 コア3】

『ぐぬぬぬ……。』

弟のキーカードが別の者に使われている事が気に食わない様で女の子は悔しそうにしていた。

「さて、反撃と行くぜ。」

アタックステップ！ ダークヴルムでアタック！ アタック時効果、BP5000以下のスピリット1体を破壊する！ デイモルフオノスケを破壊しろ！」

ダークヴルムが口から黒いブレスを放ち、デイモルフオノスケが破壊されてしまう。

「覚悟しやがれ！」

「悪いがお前のアタックは止めさせてもらう。俺のスピリットが破壊された事でバースト発動！」

伏せられていたバーストがオープンされる。それは白い鎧に3つの首を持つ竜が描かれている青のカードだった。

「なっ！ 破壊時バースト!?!」

「『護国龍オオナムチハイドラ』のバースト効果！ 最もコストの高い相手スピリット、若しくは最もコストの低い相手スピリット1体を破壊する。俺は最もコストの高いジークヴルムを指定する！」

ジークヴルムの足元に渦潮が出現し、その渦に足を取られ脱出しようともがくが、それも虚しくジークヴルムは渦に飲み込まれ破壊される。

「そしてこの効果発揮後、オオナムチハイドラをノーコスト召喚する！ コア確保の為、エルリコシヨウ1体のレベルは1にダウン。そし

てコスト3以上の「天渡」、「海首」を持つスピリットが召喚されたのでスサノヲに神託！」

(エルリコシヨウ2↓1 スサノヲ6↓7)

バーストカードが砕け散り現れたのは巨大な三つ首の竜だった。戦いの場に出れた事への喜びかオオナムチハイドラは大気を震わす程の咆哮を上げる。

護国龍オオナムチハイドラ

【レベル1 BP6000 コア1】

「そ、そんなスピリット1体だけで俺のスピリット達の攻撃を止められるとでも……。」

「誰がオオナムチハイドラで止めると言った？ フラツシユタイミング！」

大海より現れる、双頭の青き戦士！ 『海將軍かいしやうぐんイサリビノツカサ』、レベル1のエルリコシヨウに煌臨ッ！

(手札3↓2 リザーブ1「ソウルコア」↓0)

レベル1になったエルリコシヨウが地面から吹き出した水柱に包まれる。その水柱の中でエルリコシヨウの影が2つの首を持つ人型の影へと変化していく。そして槍で水柱を斬り裂き、エルリコシヨウから新たなスピリットとして生まれ変わったイサリビノツカサがその姿を見せた。

海將軍イサリビノツカサ

【レベル1 BP6000 コア1】

「神託対象のスピリットが煌臨したので再びスサノヲに神託！  
(スサノヲ7↓8)

そしてイサリビノツカサの煌臨時効果！ コスト8以下のダークヴルム、そしてテティスの2体を破壊する！」

イサリビノツカサが自身の目の前に水球を作り出し、その水球を槍で突き刺すと水球から螺旋状に渦を巻く激流が撃ち出される。その激流は1つの生き物の様に動きながらアタック中のダークヴルム、そして後ろで待機していたテティスを貫き破壊した。

「次はお前のフラッシュユタイミングだ。どうする？」

「……………。タ、ターン……………エンド……………」

『……………』

『す、凄い……………』

圧倒的に不利な状況に追い込まれた男は自分のターンを終わらす事しかできなかつた。逆に姉弟達はアマトのプレイングに完全に見惚れていた

「スタートステップ。

コアステップ。(リザーブ0↓1)

ドローステップ。(手札2↓3)

リフレッシュユステップ。(リザーブ1↓6)

メインステップ。イサリビノツカサとオオナムチハイドラにコアを3つずつ乗せ、それぞれレベル3とレベル2にアップ！ これによりイサリビノツカサのレベル3の効果が発動！ 系統「地竜」、「海首」を持つ自分のスピリット全てに青のシンボルを1つ追加する！

(リザーブ6↓0 イサリビノツカサ1↓4 「ソウルコア」 オオナムチハイドラ1↓4)

エルリコシヨウ 【赤↓赤+青】

イサリビノツカサ 【青↓青+青】

オオナムチハイドラ【青↓青+青】

イサリビノツカサが槍を上に掲げると上空に青のシンボルが3つ生み出される。そのシンボルはアマトのスピリット達の中に取り込まれ、全員ダブルシンボルのスピリットとなった。

「アタックステップ！ エルリコシヨウの効果で系統「地竜」、「海首」を持つ俺のスピリット全てにBP+3000！ 更にオオナムチハイドラのレベル2の効果も発揮！ 系統「地竜」、「海首」を持つ俺のスピリット全てにBPを10000追加する。よって、BP合計13000アップ！」

エルリコシヨウ【BP5000↓18000】

イサリビノツカサ【BP12000↓25000】

オオナムチハイドラ【BP12000↓25000】

エルリコシヨウの遠吠えに続き、オオナムチハイドラが雄叫びを上げる。2体の効果によってアマトのスピリット達は並みのスピリットを上回るパワーを手にする。

「び、BP、18000に25000ツ!？」

「アタックだ、オオナムチハイドラ！」

その巨体で大地を揺らしながらオオナムチハイドラが突進する。

「くっ！ ここはブロックするしか——」

「そうはいかない！」

フラッシュタイムング！ スサノヲの神<sup>グランスキル</sup>技を発揮！ コスト6以

下のブレイドラXを破壊する！

（スサノヲ8↓5）



スサノヲが前のターンの様に剣を振り下ろし、衝撃波を放つ。しかし今回の衝撃波はブレイドラXへと直撃し、呆気なく破壊されてしまう。そして何もいなくなったフィールドを突っ切つて来たオオナムチハイドラはゆっくりと両前足を上げた。

「ラ、ライフで受ける……。」

敗北を悟った男の前に2つのライフが出現し、オオナムチハイドラは2つのライフを同時に破壊した。

「うわああああああああアアツツ!!」



「さて、俺の勝ちだ。そのデツキを返してもらおうか。」

バトルフィールドから戻って来たアマトは早速デツキを渡す様に言う。

「く、クソツ！ 覚えてやがれ!!」

男はデツキをアマトに投げ渡し、お決まりの捨て台詞を吐きながら逃げていった。

「……………、ほら。」

「あっ！」

「ええつと。……弟のデツキを取り返してくれて、ありがとう。」

「どういたしまして。それじゃあ行くか？」

「おう。新しいクエストに行こうぜ。」

「あ！ あの！」

アマトとステイルが立ち去ろうとした時、不意に男の子が声を掛ける。

「ぼ、僕のプレイヤーネームはカイトって言います！ アマトさん、本当にありがとうございます！」

「……………。ああ、大事にするんだぞ。」

そう言っ頭を下げたカイトにアマトは優しく笑い、手を振りながら去っていった。

## 双頭の凶獣

「今回のクエストは盗賊退治だな。何でも村近くの山に盗賊のアジトができて、毎日被害が出てるらしい。ま、RPGじゃあ定番の依頼だな。」

「盗賊退治って、僕達武器とか持ってませんけど……」

「この世界での揉め事はバトスピで解決するんだよ。言っちゃえばデッキが他のゲームの武器や防具になる訳さ。」

「な、なるほど。」

「——ねえ。どうしてカイト達もいるの?」

アマトが振り返るとそこにはカイト姉弟がいた。実はデッキを取り返してもらった後、2人はアマト達に無断で付いて来たのだ。

「別にいいじゃない。『思い立ったが即、行動』って良く言うでしょ?」

「姉さん、それちよつと違うよ……。」

「俺は嬢ちゃん達がいっても気にしないぜ。このクエストも極端に難しいもんじゃねえしな。」

「うんうん、話がわかる——って、『嬢ちゃん』って何よ『嬢ちゃん』って! 私には『モモミ』って名前があんのよ!」

「ハイハイ、わかったわかった。だからそうカリカリすんな嬢ちゃん。」

(ポンポン)

「ムツキーー!! 絶対わかってないでしょッ! あと頭をポンポンすなああああああ!!」

隣でステイールとモモミがギャーギャー騒ぐ中、カイトがアマトに話しかけた。

「す、すみません。でも、アマトさんのバトルをもっと見たいんです。僕のデッキの参考にしたくて。」

「なるほど。悪いけど、君のデッキだと俺のデッキでは参考にならないと思うぞ?。」

カイトの願いに対し、アマトはハッキリと切り捨てた。

「え!? どうしてですか? 同じ赤色のデッキなのに……。」

「確かに赤だが俺のデッキには半分ぐらいしか入っていないし、赤のカードと同じぐらい青のカードも入ってる。そして俺のデッキは赤と青、2つの色のカードを使いこなす事で真価を発揮する。」

だから多色デッキは1色のデッキとは根本的に立ち回り方に違いが出るから参考にならないという訳だ。」

そう言い放ちアマトは歩く速度を早め、カイトから距離を離れた。

「なによ。アドバイスぐらい教えてくれてもいいじゃない。」

「仕方ねえさ。あいつは他人にモノを教えるのが苦手なんだよ。『技術は学ぶより見て盗め』、がモットーだしなく。けど気にしなくていいぜ。本当に嫌ならバツサリと言い切る奴だから。」

「だと良いんですけど。」

「それにクールぶってるけど、あいつ所々抜けてるんだぜ。この前なんか世間話をしてたはずなのにいつの間にか彼女との惚気け話に――」

「ステイール。」

ステイールはアマトの恥ずかしい話を始めようとするが、急に本人から声を掛けられる。ステイールは冷や汗を掻きながら、乾いた笑みでアマトに顔を向けた。

「お、おお。どうした、相棒……？　言つとくが俺はまだ何も――」

「目的地の村ってあれか？　何か襲撃されているぞ。」

アマトが指差した所には黒煙が立ち上る小さな村があった。



4人が急いで村に辿り着けばそこには逃げ惑う村人と、その村人達を追う鎧を身に纏った盗賊達がいた。

「そこまでよあんた達！　この村をこれ以上荒らさないでくれる!？」

モモミが果敢に叫ぶと、NPCである一部の盗賊達がアマト達の存在に気づく。

「ああ？　なんだこのチンチクリンは？」

「チツ、チンチ!?」

「NPCにまでチビ扱いされるとは悲しいな。」

「うっさい!!」

モモミがステイールに弄られてる事など気にせずアマトは盗賊達に話しかける。

「俺達は依頼を受け、お前ら盗賊団を捕まえに来た。大人しくしろ――  
―って言ってもどうせ意味は無いか。」

「ハッ！　当たり前だ！　それに俺達を誰だと思ってる？　泣く子も  
黙る『地竜軍』だぜ！」

「『ウオオオオオオオオオツツ!!』」

「……は？」

「ち、地竜、軍？」

「『ダサッ。』」

リーダーらしき者から団名を聞かされたアマトとカイトは啞然とし、ステイールとモモミは呆れた顔で全く同じ事を呟いた。

「うるせえ！　文句があるなら勝負しろ！　俺の部下4人とお前ら4人、1対1のタイマンだ！　やっつけてしまえ！」

「『応ッ!』」

「やっぱりこうなるかあ。」

「というか、私達もバトルするの!？」

「文句言っただけで準備しろ。相手は待ってこないぞ!」

「は、はいっ!」

地竜軍のリーダーの後ろからデッキを構えた4人の下っ端が現れる。それを見たアマト達もそれぞれのデッキを取り出し、戦いの準備をする。そして――

「『ゲートオープン、界放ッ!!』」



「へっ! 何処の馬の骨か知らねえが俺達に盾突いた事を後悔させてやる!」

「あっそう、勝手にすれば? (さて――)」

バトルフィールドへ移動し、下っ端の言葉を軽く聞き流したアマトは自身の手札を確認する。

「(向こうがバトルを申し込んできたから先攻後攻を決めれる権利はこちらにある。が、先攻で直ぐに使用できるカードが手札に無い。ドロ―に賭けるのも手だけど今回は――)」

俺は後攻を取る。」

「なら俺のターン！ スタートステップ。

ドローステップ。(手札4↓5)

メインステップ。『イグア・バギー』を召喚。

(リザーブ4↓1 手札5↓4)」

イグア・バギー (RV)

〔レベル2 BP3000 コア2 「ソウルコア」〕

下っ端が最初に召喚したのはその名の通り、バギーの様な足を付けたイグアナのスピリットだ。そのスピリットを見たアマトの第一声は……。

『地竜軍』なのに白のスピリット?」

「まっ、まだ1体しか出してないのに決めつけんな！ ターンエンド！」

慌てながら否定した時点で答えたもんでしょ——と、アマトは考えながらため息をついた。

「俺のターン、スタートステップ。

コアステップ。(リザーブ4↓5)

ドローステップ。(手札4↓5) ——うん?

………そっか、今回はフィールドに出たいのか。ならお前に任せ  
た！

メインステップ！ 『ゴッドシーカー パラサノカンナギ』を召喚  
！

(リザーブ5↓1 手札5↓4)」

ゴッドシーカー パラサノカンナギ



【レベル1 BP3000 コア1「ソウルコア」】

アマトのフィールドに現れたのは頭に一本の大きなトサカを生やし、木の枝を手に持つ竜人だった。

「パラサノカンナギの召喚時効果！ 俺のデッキを上から3枚オープン！」

パラサノカンナギが祈る様に枝を掲げるとアマトのデッキから3枚カードが開かれる。オープンされたカードは以下の3枚であった。

グランウオーカー  
創界神スサノヲ

【創界神・アマハラ】

地獄金棒ゴクソツ

【神話・霊装・天渡】

デイモルフオノスケ

【地竜】

「オープンされたカードの中にカード名『創界神スサノヲ』と系統【天渡】、【化神】を持つ赤、青のカード1枚を手札に加える。今回は『創界神スサノヲ』と【天渡】を持つ赤のカード『地獄金棒ゴクソツ』を手札に加える。そして残った『デイモルフオノスケ』はデッキの上に戻す。

（手札4↓6）」

ゴツドシーカー――

直訳すれば『神を探す者』、すなわち創界神を探すスピリット。その名の通り、効果でアマトのデッキにおけるキーカードのスサノヲを見事にサーチしたのだ。

「チッ！ テメエ、創界神使いだったか!？」

「そういう事だ。更にパラサノカンナギのもう1つの効果を発揮！メインステップの間、自身に青のシンボルを2つ追加する。」

次にパラサノカンナギが枝を振るうと何処からともなく青のシンボルが2つ現れ、パラサノカンナギの頭上で周りながら浮遊する。

「さあ、行こう。『創界神スサノヲ』を配置！ 同時に神託<sup>コアチャージ</sup>を発揮！（リザーブ1↓0 手札6↓5）」

アマトの後ろに赤と青、2色の色を持つ創界神ネクサス『スサノヲ』が顕現する。そして配置時の神託によりアマトのデッキから3枚のカードがトラッシュに置かれる。

デイモルフオノスケ

【コスト3 「地竜」】

スサノヲの轟天神殿

カイエンハイドラ

【コスト5 「海首」】

「対象となるカードは2枚、よって2チャージ！

(スサノヲ0↓2)

これでターンエンド。」

アマトは最初のターン、アタックせずに終了した。

「攻撃して来ねえならこっちから行かせて貰うぜ！ スタートステップ！

コアステップ。(リザーブ1↓2)

ドローステップ。(手札4↓5)

リフレッシュステップ。(リザーブ2↓3)

メインステップ。イグア・バギーをもう1体召喚！

(リザーブ3↓1 手札5↓4)

アタックステップ！ イグア・バギーでアタック！」

イグア・バギー (RV)

【レベル2 BP3000 コア2】

下っ端は2体目のイグア・バギーを召喚、そのままアタックの指示を下した。

「ライフで受ける！」

(ライフ5↓4)」

「ターンエンドだ。」

イグア・バギーは4つのタイヤを駆使し、アマトのライフを1つ削る。しかし下っ端はさらなる追撃をせずにターンを渡した。

「スタートステップ。」

コアステップ。(リザーブ0↓1)

ドローステップ。(手札5↓6)

リフレッシュステップ。(リザーブ1↓5)

メインステップ。パラサノカンナギの効果により青のシンボルを再び追加。更にスサノヲの効果。自身のシンボルを赤、青として扱う。この効果により、スサノヲのシンボルを赤に変更！ よって全ての軽減を満たし、『兜竜パキケロウ』をレベル2で召喚！

(リザーブ5↓1 手札6↓5)」

兜竜かぶとじゅうパキケロウ

【レベル2 BP7000 コア3】

パラサノカンナギとスサノヲの効果を駆使してアマトは丸い石の様に変わった頭部を持つ竜を召喚した。

「神託対象が出たのでスサノヲに神託。

(スサノヲ2↓3)

次に神話<sup>サーガ</sup>ブレイヴが1つ、『地獄金棒ゴクソツ』をパキケロウに直接<sup>ダイレクトブレイヴ</sup>合体する！

(リザーブ1↓0 手札5↓4)

地面が割れマグマが吹き出すとその中からゆっくりと、黒く短い棘が無数に付いた金棒が現れる。その金棒をパキケロウは器用に尻尾で絡め取ると、全身の甲殻にゴクソツと同じ棘が生えだす。

ブレイヴとはスピリットと合体する事ができるカードだ。その姿は生物や機械生命体に剣と銃、はてには戦いには向いてない物などスピリット以上に多様性である。

兜竜パキケロウ「ブレイヴスピリット」

【レベル2 BP10000(7000+3000) コア3】

「お前の力、頼らせてもらうぞパキケロウ。

アタックステップ！ 行け、ブレイヴスピリットッ！」

地面を数回蹴り付け、パキケロウは勢い良く飛び出す。

「パキケロウのレベル2、3のアタック時効果！ 俺のデッキを1枚オープンし、そのカードが赤のカードならBPを10000加算、青のカードならばコアを2つパキケロウに追加させる。」

パキケロウの力によって、アマトのデッキから1枚オープンされる。そのオープンされたカードは『護国ノ威光』。

「今回は青のマジック、『護国ノ威光』。よってパキケロウに2コアブーストし、オープンされたカードは手札に加える。

(パキケロウ3↓5 手札4↓5)

続けてゴクソツのブレイヴアタック時効果！ ブレイヴスピリツトのBPを+3000し、ワンドロー！

(手札5↓6)「

パキケロウへブレイヴスピリツト」

【レベル3 BP15000(9000+3000+3000) コア

5】

自身の効果とゴクソツの効果でパキケロウは一気に力を高めていく。

「そしてゴクソツには赤のシンボルがあるのでブレイヴスピリツトはダブルシンボルだ！」

「ここはライフで受ける！ ——グガツ!!

(ライフ5↓3)「

「ターンエンドだ。」

パキケロウが尻尾で保持しているゴクソツを振り回し、下っ端のライフを2つ破壊した。

「スタートステップ。

コアステップ。(リザーブ3↓4)

ドローステップ。(手札4↓5)

リフレッシュステップ。

メインステップ。ダークバイソンを召喚！

(リザーブ4↓0 手札5↓4)「

ダークバイソン

【レベル1 BP4000 コア1】

下っ端は新たに牛を模した黒い金属生命体を召喚する。そして彼

はニヤツと笑みを浮かべた。

「アタックステップ！ 一気に勝敗を決めてやれ！ 総攻撃だ！」

下つ端のスピリット達が一齐に走り出し、アマト側のフィールドへ突っ込んでいく。

「（一気にライフを削るつもりかッ！）

フラッシュユタイミング！ パラサノカンナギ、お前のコアを使わせてもらうぞ。ソウルコアをトラッシュに置き、がいようさい鎧要塞バロザウルノヌシをブレイヴスピリットに煌臨！ 維持コアが無くなったパラサノカンナギは消滅する。

（手札6↓5 パラサノカンナギ 1「ソウルコア」↓0）

パキケロウがゴクソツを上空へ放り投げた瞬間、足元から吹き出した炎に包まれる。そして下へ落ちてくゴクソツを尻尾でキャッチし、炎の中から現れたのは青い首長竜だった。その代わりにパキケロウの隣にいたパラサノカンナギはコアが全て無くなり消えてしまう。

鎧要塞バロザウルノヌシへブレイヴスピリットへ

〔レベル3 BP15000（12000+3000） コア5〕

「バロザウルノヌシの煌臨時効果により、BP10000以下の相手スピリットを2体破壊する！ イグア・バギー2体を破壊！」

バロザウルノヌシはその長い尾を振り回し、アマトのライフを狙う2体のイグア・バギーを薙ぎ払う。だが、その攻撃を掻い潜りダークバイソンがアマトのライフを砕く。

「——ツツう！」

（ライフ4↓3）

「ちっ！ ターンエンド。」

ライフを1つしか破壊できなかった事に苛立つ下っ端。しかし、直ぐに彼の顔は余裕の表情へと戻る。それに対しアマトは険しい表情だった。

「スピリット全員でアタックしてきたという事は次のターンを凌ぐ手段がある可能性が高い。このターン、アタックすべきか、防御に徹すべきか——」

……、スタートステップ。

コアステップ。(リザーブ1↓2)

ドローステップ。(手札5↓6)

——ッ！」

デッキから引いたカードを見たアマトは一瞬目を見開き、苦笑いを浮かべた。

「全く、カイトに言ったばっかなのに今回は赤のスピリットだけを使う羽目になるなんてね。」

リフレッシュステップ。(リザーブ2↓5)

メインステップ。スサノヲの効果によりシンボルを青に変更し、デイモルフオノスケを召喚！

(リザーブ5↓3 手札6↓5)

デイモルフオノスケ

【レベル1 BP3000 コア1「ソウルコア」】

アマトのフィールドに翼竜に似た地竜、デイモルフオノスケが召喚される。

「スサノヲに神託し、デイモルフオノスケの召喚時効果！ 破壊するネクサスは存在しないが青のシンボルが存在する為【連鎖<sup>ラッシュ</sup>】発揮！」

デイルモルフオノスケにコアを1つ追加！

(スサノヲ3↓4 デイルモルフオノスケ1↓2)

そしてリザーブのコア全てをブレイヴスピリットに追加！

(リザーブ3↓0 バロザウルノヌシ5↓8)

アタックステップ！ ブレイヴスピリット、ブレイヴアタック！

ゴクソツのアタック時効果でBP+3000し、1枚ドロー！

(手札5↓6)」

ゴクソツを振り回し、バロザウルノヌシが動き出す。しかしその姿を見ても余裕の態度を崩さない下っ端は、手札から1枚のカードを取った。

「フラッシュタイミング！

マジック、『ブリザードウォール』ッ！」

下っ端が手に取ったカードを使うと、彼の周囲が吹雪に包まれていく。

「このターン、俺のライフはブロックされなかったスピリットのアタックでは1しか減らされなくなる！ これでこのターンは確実に生き残れるぜ！」

(リザーブ4↓0 手札4↓3)」

ガッツポーズをし勝ち誇った表情をする下っ端を見たアマトは、不敵な笑みを浮かべた。

「『ブリザードウォール』ならこちらの勝ちだ。フラッシュタイミングッ！」

怒れる暴君よ！ その力を解き放ち、我が敵に滅びを与えよ！

暴双恐龍スーパーデイルノス、ブレイヴスピリットに煌臨ッツ!!」





はマジックの効果で守られている！

ブレイヴスピリットのアタックはライフで受ける！

(ライフ3→2)

スーパーデイルノスが尻尾から右手に持ち替えたゴクソツで下つ端のライフを破壊するが、『ブリザードウォール』によって本来2つ破壊されるライフが1つしか削れなくされた。

「煌臨は焦ったが、所詮はコケ脅しだった訳だな。」

「悪いけど、もうバトルは終わった。」

「——はあ?」

「この瞬間、スーパーデイルノスのレベル2、3の効果! バトル終了後、自身の煌臨元カード1枚につき相手のライフを1つ、トラッシュに置く! スーパーデイルノスの煌臨元は2枚! よって、お前の残された2つのライフを砕く!」

「なっ!」

スーパーデイルノスから溢れ出る赤黒いオーラが2つの球体へと形を成してく。その2つの球体はそれぞれパキケロウとバロザウルノヌシの姿へと変化した。

『ブリザードウォール』が守れるのはアタックによるライフ破壊のみ。効果によるライフ破壊は防ぐ事はできない!

行け、パキケロウツ! バロザウルノヌシツ!

アマトの声に応じ、パキケロウとバロザウルノヌシが同時に駆け出す。2体は吹雪をもともせず一気に距離を詰め、パキケロウは石の

ように硬い頭部で、バロザウルノヌシは鞭のような尾で下つ端の2つのライフを破壊する。

「ぎ、ぎいやあああああああああ!!!

(ライフ2↓0)」



「ほっ！ つと。」

バトルフィールドから戻って来たアマト。彼の目には腕を組んで立つステイールに、その場で膝を付いてるカイトとモモミが映った。

「ステイール、この状況は？」

「負けて落ち込んでるらしい。で、勝てたのは俺とお前か。」

「ううっ……。」

「すみません……。」

ステイールの隣に並び立ち、アマトは地竜軍のリーダーを睨み付ける。

「め、面目ねえ、アニキ。」

「なーに、お前らのお陰でコイツらのデツキがどんなモノかわかったからな。」

「1回のバトルだけで俺達のデッキ全てを理解したと思ったたら大間違いだぜ？」

「ハン！ 1回勝ったぐらいで調子に乗んなよ。こつちにはまだバトルしていない奴らが10人も」それってこの人達のことだよな？」――はあ？」

リーダーが後ろに振り向くと、そこには御手や胸当て等の軽装備を着けた2人の少女に忍者の様な恰好をした少女の3人がいた。その彼女達の背後にはボロボロの状態で地面に倒れ伏した10人程の男達も存在していた。

「なツツ!!？」

「へっ!? メイ!? なんでここに!？」

黄色の軽装備を身に纏っている少女を見たアマトは驚きの声を上げる。何故ならば、その少女はアマトのリアルな妹である雨凧ヒカリだからである。因みにプレイヤーネームは『メイ』である。

「ヤッホー、アマト兄<sup>にい</sup>！ 実は友達と3人で新しいクエストを受けたんだけど、アマト兄とブツキングしてみたみたい。ホンツト偶然だね。あ、それとステイルさんもこんにはー！」

「応。……って！ さりげ無く俺をハブるなツ!!」

「お、お前ら！ 俺の部下をいつの間にな?！」

「あ、この人達？ アマト兄達に意識が向いてる間に全員倒したのよ！ 私のデッキは速攻系だからサクツと片付けちゃった。」

メイにアツサリと言われ、地竜軍のリーダーは言葉を失ってしま  
う。そこへ忍び衣装を着た少女が口を開けた。

「それで、どうしましょうか？ そちらは負けた方も含めてあと5  
人。私達は3人、いえ、アマトお兄さんを合わせて4——あ、ついで  
にステイルさんも合わせたら丁度5人になりますね！ 1対1で  
バトルできますよ。（ニッコリ）」

「お前ワザと俺をのけ者扱いしたな!? したよね!？」

忍び衣装の少女は笑顔のままステイルルの言葉を聞き流す。そん  
な彼女に白い軽装備の少女が口を尖らせて話し掛けた。

「もう、大切な味方のステイルルさんで遊ばないの。そんな事してな  
いで早く倒すわよ。」

「俺のフォローは嬉しいけどよ、『そんな事』だけで纏められるのは釈  
然としねえ。」

「え？ あツ!? ス、スママセン！ さっきの言葉に他意は無くつて  
——!」

「ぐぐぐつ、ここは逃げるぞ!!」

「えっ、あつ!? ちよ、待って下さいよアニキイイー!!」

状況的に不利と感じたのかアマト達が喋っているスキを突き、地竜  
軍のリーダーが一足早く逃げ出す。それを見た残りの4人も後を  
追って逃げていった。

「あ、逃げられた。どうしよつかアマ兄?」

「ああ、うん。一先ずお互いの情報を共有してから追いかけてよう。こういう場合、村人が盗賊のアジトを知っている可能性が高いから無理に追わなくても大丈夫と思う。」

「リョーカイ！ それじゃあそっちの2人に自己紹介しとくね！ と  
いうか、アマ兄が知り合い以外の人とパーティ組むなんて珍しいね。  
雪でも降るのかな？」

「……前々から思ってたがお前、実の兄に対して失礼な妹だな。」

頭を掻きながらため息を吐くアマト。そんな兄を気にせず落ち込  
むカイト達に元気よくメイが話しかけるのだった。

その名は化神（ゴツド）

「——それで、尻尾巻いて逃げてきたつてわけかい？」

「す、すみません！ で、ですが、まさか別のパーティが現れるなんて

——「見苦しい言い訳をするなッ！」——ヒイツ！」

「つたく。……だが、「地竜」の創界神グランウオーカー使い、ねえ。」



「ええ。今俺達は『地竜軍』と名乗る盗賊団のアジトがあると思われる山の近くに来てる訳だが、これからどうするべきか何か意見がある奴は？」

「はいッ、ステイール隊長！」

「……………どうぞ、メイ隊員。」

「こんなところで作戦会議してないで突げk「却下だ。」何故!?!」

アマト達は盗賊に襲撃された村の人達からの情報を元に、アジトがある場所を特定、現在は茂みの中でどうやって盗賊達を壊滅させるかを話し合ってるところだ。

……順調かどうかは別問題であるが。

「当然でしょう。罾とか待ち伏せとかあるでしょうし。」

「私達メイちゃんみたいに無鉄砲な行動はしないしねえ。」

「アカリちゃんにミヨちゃんまでも否定!? ア、アマ兄は違うよね!」

白の軽装備の少女『アカリ』に続き、忍び装束を着た少女『ミヨ』からもダメ出しを受けたメイはアマトに泣きつく。が――

「バカの一つ覚えの如くバカ正直に突っ込むお前の癖は直すべきと思う。だから相手のハツタリにバカみたいに引つかかるんだ。」

「実の兄にバカって言われたツ!? しかも3回もツ!! うわああアアアッ! みんな私をいじめるうううう!!!」

「何なのよこれ……。」

アマト達の会話に入れずカイトと共に蚊帳の外と化したモモミはそう呟いた。

「大丈夫ですよ。メイちゃんとアマトお兄さんはいつもこんな感じなので。」

「全然安心できないんですが。」

「てかミヨ、だったわよね。あなたアマトの妹じゃないでしょ? なんで『お兄さん』ってつけてるのよ。」

「それはメイちゃんのお兄さんだからなの。」

「んな無駄話は置いといて、盗賊のアジトはどう探す? 俺の妹みたいにバカだけの集まりな訳ないだろうし。」



「メイ、相棒から間接的に4回目のバカを言われた感想は？」

「アマ兄も実の妹に対して失礼だと思いまーす。アウチツ！」

「……………どうしたもんか。」

メイをデコピンで無理矢理黙らせたアマトがアジトを見つける方法を考えてると――

「アタシは『地竜軍』の頭領、名はグレン！そこに隠れてるのはわかってんだよ、出てきなッ！」

「……………。アマト、どうやらリーダーはバカみたいだぞ？」

「そのようだね…………。」

アマト達がゆつくりと茂みから顔を出すと、10人程の取り巻きを引き連れたガタイの良い女性が立っていた。その取り巻きの中にはアマト達から逃げた盗賊達もいる。

「あんた等、ウチの子分達を随分可愛がってくれたみたいじゃないか。この落とし前はキツチリ支払って貰うよ！」

「わく、ヤクザっぽいノリじゃん。」

「どうでもいいさ。戦って勝つ事がクエストクリアの条件だろうしな。よし、今回は俺が――「あんたはすっこんでな。」――ア”ア”ッ？」

「アタシが落とし前を払わせたいのは、あんただよ。」

腕を回しながら前に出たステイールを一蹴したグレンはアマトを指差す。

「……は？ 俺？」

「部下からの報告に面白そうな話を聞いてねえ。

『変な帽子を被った「地竜」の創界神使いと戦った』と。『地竜軍』の頭として、戦わずにはいられないのさ！」

グレンは自身のデツキを構え、戦闘態勢に入る。

「良かったねアマ兄、ご指名だよ！ ファイトオオ、一発ツ！」

「全ツ然、良くねえんだが!? ステイールがやりたがってるのにどうしてこうなる!?! お前も何か言えよ！」

「……アマト。あのババアをぶっ潰して来い。」

「なんかキレてるし!?! ……ハア、わかったよ。」

自分が行かないと話が進まないと察し、アマトはため息を吐きながらデツキを取り出す。

「それじゃあ、準備はいいか!?!」

「いつでも。」

「ニゲートオープンツ、界放ツツ!!」



バトルフィールドへと移動したアマトとグレンはそれぞれのデッキを台上にセットしカードを4枚引く。その様子をステイール達とグレンの部下達が映像を通じて眺めている。

「先行は俺が取る。スタートステップ。

ドローステップ。(手札4↓5)

メインステップ。ネクサス、『スサノヲの轟天神殿』を配置してターンエンド。

(リザーブ4↓0 手札5↓4)

アマトの背後に巨大な社が出現し、彼はそのままターンを相手に渡した。

「さあて。地竜を使う者同士、派手にやろうか！ スタートステップ！

コアステップ！(リザーブ4↓5)

ドローステップ！(手札4↓5)

メインステップ！ こっちもネクサス、『海底国の秘宝』を配置！

(リザーブ5↓1 手札5↓4)

そしてマジック、『ストロングドロ』！ 3枚ドロして2枚を破棄するよ！

(リザーブ1↓0)

グレンの背後に三つの海竜の像とその間に安置されている赤い宝玉が出現する。その後グレンは3枚カードを引いた後、以下の2枚をトラッシュユへ送った。

海底国の秘宝「ネクサス」

海魔巢食う海域「ネクサス」

「最後はバーストをセットしてターンエンドさ！  
(手札4↓3)」

『青のネクサスにマジック。今のところ地竜のちの字もありませんが、アマトさんと同じ赤青の混色デッキのようですね。』

『……………だとしたら妙だな。』

アカリは相手の動きを観察し、デッキの内容を推測する。しかしそれを聞いたステイールはある違和感を感じる。

(青の【連鎖】を使いこなす「地竜」はスサノヲの配下のスピリットがほとんど。それ以外のカードは正直使いづらい物ばかり。主戦力になれる様なカードは存在しない筈。)

「――、スタートステップ。」

ステイールの違和感アマトも感じているようだった。

「コアステップ。(リザーブ0↓1)

ドローステップ。(手札4↓5)

リフレッシュステップ。(リザーブ1↓5)

メインステップ。創界神ネクサス、『創界神スサノヲ』を配置！

(リザーブ5↓4 手札5↓4)」

光の粒子が集まりアマトのキーカード、『創界神スサノヲ』が顕現した。

「こいつが言ってた創界神かい。いい面構えな神様じゃないか。」

「同名カードが存在しないので配置時の神託<sup>コアチャージ</sup>を發揮。俺のデッキを上から3枚トラッシュに、——ッ！」

トラッシュに置かれた3枚のカードを見たアマトは思わず目を見開いた。

デイモルフオノスケ

【コスト3 「地竜」】

デイモルフオノスケ

【コスト3 「地竜」】

護国ノ威光

『マジかよ、絶好のチャンスだというのにデイモルフオノスケが2枚落ちるか!?!』

『ううツ、アマ兄のネクサス破壊とコアブ要員なのに……。』

神託の結果にステイルとメイは戸惑いを隠せなかった。

「……、対象は2枚。よってスサノヲにコアを2つ置く。

(スサノヲ0↓2)

だがこの瞬間、トラッシュの『護国ノ威光』の効果！ スサノヲの神託でトラッシュに置かれた時、手札に加えられる。そうした時、自分の創界神にコアを1つ追加する。よってスサノヲにコアを追加！

(手札4↓5 スサノヲ2↓3)

トラッシュから自動的に『護国ノ威光』が浮かび上がり、それをキヤッチしたアマトが手札に加える。

だが——

「せっかくトラッシュユから回収したところだが残念だったね。  
相手の手札が増えた事により、バースト発動！」

グレンがセツトしていたカードが裏返る。そのイラストを見たア  
マトは驚きの声を上げる。

「ッ!? 『グリードサンダー』ッ!?」

「そうさ。そしてこのマジックはバーストが発動した時、相手の手札  
が5枚以上あればその手札全て破棄させる！」

「グッ!!」

(手札5↓0)

アマトが持つカードに青い稲妻が走り、その痛み思わずアマトは  
手を引いた。そして彼の手から離れた以下のカード達はトラッシュ  
へと落ちてしまう。

護国ノ威光「マジック」

ゴッドシーカー パラサノカンナギ「スピリット」

海將軍イサリビノツカサ「スピリット」

絶甲氷盾「マジック」

地爪竜エルリコショウ「スピリット」

「その後、相手はデッキから2枚ドローする。さあドローしな。」

「…………… —クソッ。

(手札0↓2)

『そ、そんな。イサリビノツカサがトラッシュユに……………。』

『おまけにアマトお兄さんのあの表情。非常に悪い手札かも……。』

『ウオオオオオオ！ さすが姐御！』

『そのままやってくれえええ!!』

引いた2枚のカードを見たアマトは顔を歪めながら悪態をつく。その様子にカイト達は暗い表情をし、逆に地竜軍らはグレンが押し立てる為に盛り上がり出す。

「……ネクサス、『スサノヲの轟天神殿』をもう1枚配置。

(リザーブ4↓3 手札2↓1)

バーストをセットし、ターンエンド。

(手札1↓0)」

『バーストは引けたか。けど……。』

『アマトさんの手札は0。手札を増やすカードが来ない限り1枚だけで戦わなければいけないなんて……。』

カードバトルにおいて手札の枚数が多いほど大きなアドバンテージとなる。何を握っているのかわからない不確定要素を相手に与えるからだ。

「さて、向こうが立て直す前に準備を進めとくかい。スタートステップ！

コアステップ！ (リザーブ0↓1)

ドローステップ！ (手札3↓4)

リフレッシュステップ！ (リザーブ1↓6)

メインステップ！ ソウルコアも使って『エイプウィップ (RV)』を召喚！

(リザーブ6↓1 手札4↓3)

エイプウィップ

【レベル1 BP1000 コア1】

グレンのフィールドに細長い腕をした緑色の猿が現れる。

「召喚時効果発揮！ ボイドからコア1個をリザーブに！

(リザーブ1↓2)

更に、ソウルコアを召喚コストに使用したのでトラッシュに2個追加！

(トラッシュ4↓6)

更に更に！ 『ピナコチャザウルス』も召喚！

(リザーブ2↓0 手札3↓2)

ピナコチャザウルス

【レベル1 BP1000 コア1】

次に召喚されたのは背中に1列に並んだ棘に尻尾の先がハンマーの様な形になっている赤のスピリットだ。

『緑のスピリットに緑としても扱える地竜のスピリットも出るのですか!? 一体どんな構築なんでしょうか?』

『あの猿だけならコアブ要員だろうが、赤緑の【連鎖】も入れてるのか?』

「バーストを再びセットし、アタックステップ！ ピナコチャザウルス、アタックしな！

(手札2↓1)」



「ライフで受ける！——ツウ!!  
(ライフ5↓4)」

ピナコチャザウルスが誰もいないアマトのフィールドを走り、尾のコブでアマトのライフを1つ削った。

「次だ、エイプウィップ！ あんたも——」

「させるか！ ライフ減少により、バースト発動ツ!!」

アマトの声に合わせ伏せられていたカードが裏返る。そのカードは『グリードサンダー』の様なマジックカードではなく、赤のスピリットカードだ。

「バースト効果により、BP17000以下の相手スピリット1体を破壊する！ エイプウィップを破壊！」

突如、エイプウィップの全身が燃え上がる。エイプウィップは慌てながらその炎を振り払おうとするも、塵一つ残らず消えてしまう。

「そしてバースト効果発揮後、コストを支払わずこいつを召喚する。現れるー！ 『大凶龍<sup>だいきょうりゅう</sup>ギガノマガツカミ』！ レベル2で召喚ツ！  
(リザーブ4↓1)」

フィールドに現れた赤のシンボルを切り裂く様に砕き、背中に巨大な金色の腕と自身の体と同じ大きさの剣を持ったスピリットが降り立つ。

ギガノマガツカミ

【レベル2 BP10000 コア3】

「ギガノマガツカミのレベル2、3の効果！ 自身のBPを+10000アップさせる！ よってギガノマガツカミはBP20000となる！」

そしてスサノヲに神託！

（スサノヲ3↓4）

ギガノマガツカミ【BP20000（10000+10000）】

一気に力を高めたギガノマガツカミが大きく吠える。

「ふっ、ターンエンド。」

しかしそれを見てもグレンは驚くどころかむしろ余裕の態度だった。

「スタートステップ。」

コアステップ。（リザーブ1↓2）

ドローステップ。（手札0↓1）

リフレッシユスステップ。（リザーブ2↓4）

メインステップ。兜竜かぶとりゅうパキケロウをレベル2で召喚！

（リザーブ4↓0 手札1↓0）

兜竜パキケロウ

【レベル2 BP7000 コア3「ソウルコア」】

ギガノマガツカミの横にパキケロウが召喚される。そのパキケロウだが、ギガノマガツカミを見て、一瞬だけ気圧されてしまった。

「神託対象が召喚されたのでスサノヲに神託。」

（スサノヲ4↓5）

アタックステップ！ パキケロウ、アタックだ！

パキケロウのレベル2、3アタック時効果、俺のデッキを1枚オープンし、赤のカードならBP+10000、青のカードならコアを2つ追加する！」

アマトのデッキから1枚のカードがオープンされる。オープンされたカードは『カイエンハイドラ』。赤と青の2色のカードだ。

『赤のカード、って事はBPアップ？』

『え？ でも青のカードだからコアを増やすんじゃない？』

モモミとカイトがどちらの効果なのか悩み出す。そこへアマトの口から答えがでる。

『『カイエンハイドラ』は赤と青のカード。この場合2つの効果を同時に発揮する！ よってパキケロウはBP+10000、更にコアを2つ追加！ これによりパキケロウはレベル3へとアップ！（パキケロウ3↓5）』

兜竜パキケロウ

〔レベル3 BP19000（9000+10000） コア5〕ソウルコア〕

BPとコアを増やしつつパキケロウが突撃する。

「ライフだ！ くれてやる！」

（ライフ5↓4）

「ターンエンド。」

「なんだい、もう1体はアタックしてこないのかい？」

まあこっちは遠慮はしないさ！ スタートステップ！

コアステップ！（リザーブ2↓3）

ドローステップ！（手札1↓2）

リフレッシユスステップ！（リザーブ3↓10）

メインステップ！ マジック、『ストロングドロ』！ 3枚ドロ  
してこの2枚を破棄！

（リザーブ10↓9）

海魔巢食う海域 「ネクサス」

黄昏の暗黒銀河 「ネクサス」

「次はブレイヴ、『フォビッド・バルチャー』を召喚！（リザーブ9↓  
5 手札2↓1）」

フォビッド・バルチャー 「ブレイヴ」

【レベル1 BP4000 コア1「ソウルコア」】

『あのブレイヴ！ 確か召喚時効果で——』

「フォビッド・バルチャーの召喚時効果！ トラッシュの紫、緑、青の  
ネクサス全てを、コストを支払わずに配置する！ これにより『海底  
国の秘宝』、『海魔巢食う海域』2枚、そして『黄昏の暗黒銀河』の合  
計4枚を配置する！」

グレンのフィールドに次々とネクサスが現れる。その光景は圧巻  
の一言であろう。

「これでターンエンドだ。」

『あ、今回はネクサス配置だけなんだ。』

『ですが大量のコアに軽減確保用のネクサス。これで次のターンを渡したら高コストのスピリットが出てくる可能性が高くなります。』

「俺のターン。スタートステップ。」

コアステップ。(リザーブ0↓1)

ドローステップ。(手札1↓2)

リフレッシュステップ。(リザーブ1↓2)「

メイとアカリの会話を聞きながらアマトは各ステップを進めていく。

「メインステップ。パキケロウのレベルを2にダウン。」

(パキケロウ5↓3 リザーブ2↓4)

そして『カイエンハイドラ』をレベル2で召喚！

(リザーブ4↓0 手札2↓1)「

カイエンハイドラ

【レベル2 BP6000 コア2】

アマトはパキケロウの効果で手札に加えたスピリットカードを召喚した。そのスピリットは左半身が炎、右半身が水で構成された体を持つ双頭の竜だ。

「コスト3以上の系統「海首」を持つスピリットが召喚されたのでスサノヲに神託！」

(スサノヲ5↓6)

カイエンハイドラの召喚時効果！ デッキから3枚ドロし、2枚を破棄する！ ……俺はこの2枚を破棄する。

(手札1↓4↓2)「

鎧要塞<sup>がいようさい</sup>バロザウルヌシ 「地竜」

ゴッドシーカーカミムスビハイドラ「海首」

「この効果で系統「地竜」、「海首」を持つスピリットを1枚ずつ破棄した時、ボイドからコアを1つカイエンハイドラに置く！」

(カイエンハイドラ2↓3)

「ならもっかいバースト頂くよ！ 相手の召喚時効果発揮により『キングスコマンド』のバーストを発動ッ！」

デッキから3枚ドロし、1枚を捨てる！ アタシは『ストロングドロー』を破棄！

(手札1↓3)

そしてフラッシュ効果も使用！ これでこのターンの間、コスト4以上の相手スピリットはアタックできなくなるのさ！

(リザーブ5↓3)

グレンの伏せてたマジックカード、『キングスコマンド』によりアマトのスピリット全員の動きが封じられてしまった。

(クソッ！ 召喚時バースト、しかも『キングスコマンド』だったのか！ アタックを封じられた以上、今の手札でできる事は——)

このままメインステップを継続。バーストをセット。そして——  
(手札2↓1)

アマトは手札に残った1枚のカードに手を伸ばすが途中で止め考え込んでしまう。残されたカード——『護国龍ここくりゆうオオナムチハイドラ』を見ながら。

「……………」

「あん？ 『そして』、でどうすんだい？」

「……………、カイエンハイドラのコアを1つギガノマガツカミに移動させギガノマガツカミをレベル3にアップ。これでターンエンド。  
(カイエンハイドラ3↓2 ギガノマガツカミ3↓4)」

ギガノマガツカミ

【レベル3 BP23000(13000+10000) コア4】

〔「地竜」、青のネクサス。これらから考えられる相手のキースピリットは恐らくアイツ。ブロッカーとしてオオナムチハイドラを出してもレベルを上げなければそのスピリットで破壊されてしまう。この判断、吉と出るか凶と出るか……。〕

アマトの予想と判断。それらが正しいか誤りかが決まるグレンのターン。

「スタートステップ！

コアステップ！（リザーブ3↓4）

ドローステップ！——ツ!! へっ、やっと見つけたよ。

(手札3↓4)

リフレッシュステップ！（リザーブ4↓10）

メインステップ！ 冥土の土産に見せてやるよ。アタシのキーカードをなツツ!!」

『『『『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツツ!!!!』』』』

待ってたぜ姐御オオオオツツ!!』』』』

『ちよっ!?! 喧しいわよ、あんた達!!』

『さっきのドローでキースピリットを引いたんだよお姉ちゃん！このままだとアマトさんが!』

「——キーカード？」

『いや流石に大丈夫だろ。アマトのフィールドにはレベル3のギガノマガツカミがいる。自身の効果でBPは23000、並のスピリットでは勝てないだろ。』

『そ、そうだよ！ それにアマ兄はまだ1枚手札残ってるし、きつと返り討ちにするから！』

一斉に地竜軍の下っ端達が騒ぎ出す。その様子からエース級のカードが来たと察するステイル達だが、アマトはある違和感を感じた。

(あのNPC、さっき『キースピリット』と言わなかった。呼び方をそう言うように設定されてる？ いや、まて。そもそもあのデツキのエースカードが本当にスピリットなのか？)

自身の予想が少しずつ崩れていく。そんな気がし始めたアマトだが、その予感是最悪な形での中してしまふ。

「現れるッ!! スピリットを超越したモンスター!!!」

グレンが手を掲げると、空中に六芒星に似た形の金色のシンボルが現れる。それを見たアマト、ステイル、メイ、アカリ、ミヨの5人は一瞬で目の色が変わった。

「……嘘だろ、スピリットの方じゃない!？」

『ちよ、マズい、ですよねコレ? ——アカリちゃん?』

『。』



『ア、アアアカリちゃん!? 戻ってきてー!!』

『オイ、オイオイオイ冗談だろ!? 前までNPCがアレを使うなんて情報無かつたぞ?! まさか今回のアツプデートで!?!』

「召喚条件は自分の赤、青のスピリット1体以上! さあ、出て来なツ!!

全てを越える究極の地竜! アルティメット・ガンディノスツツ!!!  
(リザーブ10↓3 手札4↓3)」

金色のシンボル、アルティメットシンボルが砕け散る。次の瞬間大地に亀裂が走り、その中から全身に金色の恐竜達の骨を付けた巨大な竜が這い上がる。その圧倒的な存在感はギガノマガツカミに匹敵、否、それ以上だった。

——アルティメット  
スピリットの枠組みには収まらず、例外はあるが基本的に同コスト帯のスピリットと比べても、BP勝負では最大レベルのスピリットでようやく最低レベルのアルティメットとまともに立ち向かえられる正に究極の存在。

アルティメット・ガンディノス 「アルティメット」  
【レベル5 BP24000 コア5 「ソウルコア」】

「不足コア確保の為、フォビッド・バルチャーには消えて貰う。  
(フォビッド・バルチャー1↓0)」

コイツが、アタシの切り札。けどこれだけで満足しちゃあダメさツ!  
ブレイヴカード、『火星神剣マーズブリンガー』をアルティメット・ガンディノスに直接合体ツ!!  
ダイレクトブレイヴ

(リザーブ3↓0 手札3↓2)」

上空から黒い巨剣が飛来する。その巨剣が地面に突き刺さる前に掴み取ったアルティメット・ガンディイノスはマーズブリンガーから送られる力により禍々しいプレッシャーを放つ。

アルティメット・ガンディイノス「ブレイヴアルティメット」

「レベル5 BP29000(24000+5000) コア5「ソウルコア」」

「素のBPですらギガノマガツカミに勝っているにも関わらず、ブレイヴまでもッ！」

「念の為バーストも付けてやる。

(手札2↓1)

そしていよいよアタックステップだ！ アルティメット・ガンディイノス、ブレイヴアタックッ！」

マーズブリンガーを構え、アルティメット・ガンディイノスがゆつくりと歩み始める。

「アルティメット・ガンディイノスのアタック時効果、【強襲？2】発揮！ ターンに2回まで自分のネクサスを疲労させる事で回復する！

『海底国の秘宝』を1つ疲労させ、アルティメット・ガンディイノスを回復！

そしてもう1つのアタック時効果！ アルティメット U トリガー、ロックオンッ！」

グレンの右手がアマトのデッキに指差すと、彼のデッキの上から1枚のカードが弾かれトラッシュユへと置かれる。

「答えな。そのカードのコストを！」

「……。『護国ノ威光』、コストは4だ。」

「ヒットツ！ トラッシュユへ落としたカードのコストがアタシのアルティメット・ガンディノスのコストよりも低ければ、BP10000以下の相手スピリット1体を破壊できる！」

『それじゃあ、アマトさんのフィールドにいるスピリットでBP10000以下のスピリットはパキケロウとカイエンハイドラの2体！  
そのどちらかが破壊されてしまうんですか!?!』

「けど、ヒットしたカードがコスト4だった事によりマーズブリンガーのブレイヴアタック時効果を発動！

Uトリガーでヒットしたカードが全てコスト4以下の時、ヒット効果の代わりに自分のターン終了時に自分のアルティメット3体までを回復させ、『アタックステップ』と『エンドステップ』を1回ずつ行う！

さあ、そのカード1枚だけで2回のアタックステップを凌げられるかい!?!」

「くツツ！」

(今はこのバーストに掛けるしか勝ち筋が残されていないツ！)

ライフで受ける!!」

『アマトツ!? 今のガンディノスはダブルシンボルだぞ!?!』

「潔いねえ、嫌いじゃないよ！」

アルティメット・ガンディノスがマーズブリンガーを振り下ろし、アマトのライフを2つ破壊する。

「ガアアツツ!!」

(ライフ4↓2)

——ツウ、これで良い。ライフ減少により、バースト発動ツツ!! 『選ばれし探索者アレックス』をバースト召喚ツツ!!」

白のシンボルが出現し、その中から紫色の長髪の女の子が現れた。

選ばれし探索者アレックス

〔レベル1 BP5000 コア1〕

「そしてアレックスの効果! デツキから1枚ドロウするか、ボイドからコアを1つリザーブに置くかを選べれる。俺はドロウを選択! (手札1↓2)

更に、このバトルが終わった瞬間、アタックステップを強制終了させる!」

アレックスが杖を取り出すとアマトのフィールドにバリアの様な物が現れ、グレン達はこれ以上の進撃が出来なくなってしまう。

「チィッ。

けど、マーズブリンガーの効果を忘れてないだろうね? このアタックステップは終わっちゃったが、2回目のアタックステップが来ることにな!!

2回目のアタックステップ! やれ、ブレイヴアルティメットツツ!!

アタック時効果、【強襲?2】ツツ! もう1つの『海底国の秘宝』を疲労させ、アルティメット・ガンディノスを回復!

続けてUトリガー、ロックオンツツ!!」

「——ツ! コスト5、『兜竜パキケロウ』。」

「ヒットツ！ 今度こそBP10000以下の相手スピリット1体を破壊させて貰う！ カイエーンハイドラを破壊だああ！」

アルティメット・ガンディノスが火球を放ち、その業火に包まれたカイエーンハイドラが破壊されてしまう。

『アマ兄の残りライフは2！ しかも【強襲】のせいでブロックしてももう1回アタックが来ちゃう！』

「さあ、ブロックしないと負けるぞ！」

「……ブロックはする。が、先にフラッシュタイミングッ！ マジック『絶甲氷盾』を使用ッ！」

(リザーブ4↓1 手札2↓1)

「何ッ!？」

今度はグレンのフィールドが数多の氷に覆われてしまう。

「このバトルが終了した時、アタックステップは終了する！」

ギガノマガツカミ、お前のブロックでこのステップを終わらせてくれッ！」

アマトの声に大きな咆哮で答えたギガノマガツカミがアルティメット・ガンディノスに立ち向かう。双方、巨剣同士を叩き付け合い、一歩も引かず力を比べ合う。

だが、互いに距離を取った時、アルティメット・ガンディノスがマーズブリンガーを投擲する。ギガノマガツカミはそれを上空へ弾くが、その隙きを突いたアルティメット・ガンディノスがギガノマガツカミの首元に喰らいつく。そのままアルティメット・ガンディノスは首を左右交互に振り、ギガノマガツカミを何度も地面に叩きつける。

『——ッッ！……ううっ。』

兄のスピリットが成すすべ無く甚振られている様に耐えきれなくなつたのか、メイが両手で顔を隠してしまふ。

数十回程叩き付けられ、ギガノマガツカミは解放されたが、フラフラしておりとても立ってはいられない状況だった。そこへ、アルティメット・ガンデイノスがようやくギガノマガツカミに止めを刺す気になつたのか、マーズブリンガーを回収し、豪快に振り下ろす。強烈な一撃を受け、ボロボロにされたギガノマガツカミは爆発四散してしまつた。

(……ッ。すまない、ギガノマガツカミ。)

「命拾ひしたね坊や、ターンエンドッ。」

グレンはこのターンで決着をつけるようだったが、それが出来ず初めて悔しそうな表情をする。だが、それはアマトも同じだった。

「(バーストをオオナムチハイドラにしておけばアルティメット・ガンデイノスを破壊出来た。俺の判断は間違っていたのか……。)

って、迷うな俺ッ！ まだバトルは終わってない！

スタートステップ！

コアステップ！(リザーブ4↓5)

ドローステップ！」

デッキに触れた瞬間、アマトに緊張が走る。

「(間違いなく、このドロウのカードで、俺の運命が決まる！)

ドローツ!! ——ッッ!?

(手札1↓2)

引いたカードを見たアマトは目を見開き、そして――

「リフレッシュステップ！（リザーブ5↓10）  
メインステップ！ 『護国龍オオナムチハイドラ』をレベル2で召喚ッ！

（リザーブ10↓3 手札2↓1）  
スサノヲに神託とオオナムチハイドラ、レベル2の効果！ 自分の系統「地竜」、「海首」を持つスピリット全てのBPを+10000！（スサノヲ6↓7）」

護国龍オオナムチハイドラ

【レベル2 BP22000（12000+10000） コア4】

兜竜パキケロウ

【レベル2 BP17000（7000+10000） コア3「ソウルコア」】

白い鎧を身に着けた三つ首の竜――オオナムチハイドラが姿を現した。

『――はあッ!? オオナムチハイドラを素出しすんのかアマト!?!』

「フッ、そんなスピリットを出したところで意味がある訳――」

「意味は大アリだ。このカードを使う為に！ マジック、『フォースドロ』を使用ッ！

（リザーブ3↓1 手札1↓0）

このマジックは、自分の手札が4枚になるようにドローした後、このカード自身をフィールドへ置く効果を持っている！」

「――っ!? 手札を4枚になるように!?!」

『い、今、アマトさんの手札は0！ つまり——』

「カードを4枚、ドローするッ！

(手札0↓4)」

1枚のカードで4枚もドローしたアマトは手札を確認する。

「……来たッ。来てくれたんだなッ！

まずはパキケロウをレベル1にダウン。ソウルコアも外す！

(パキケロウ3↓1 リザーブ1↓3)」

兜竜パキケロウ

【レベル1 B P 15000 (5000+10000) コア1】

「な、何をするつもりだ!?!」

「そっちがエースを出すならこっちも出すって事さ！

来たれッ！ スサノヲの赤き半身ッツ!!」

アマトが手札から1枚のカードを天に掲げる。すると、背後に佇むスサノヲの体から赤のシンボルが出現する。そのシンボルがバトルフィールドの中央へ来ると、アマハラの創界神ネクサスの紋章と同じ亀裂が入る。

同時にアマトの胸に炎が集まり、竜の頭部を模したアーマーが装着される。

「その強靱なる力を持って、我らの敵全てを薙ぎ払え！

召喚、化神スピリット、『ゴッド恐竜武神ムラクモレックス』ツツ!!」

ヒビから火が吹き出し、シンボルは炎に包まれる。その炎を切り裂



き現れたのは和風の鎧を着、右に七支刀、左に盾を持ったテイラノサウルスに似た竜人だった。

「不足コア確保の為、アレックスのコア全てを外す！ ゴメン、アレックス。」

(アレックス1↓0)

謝るアマトだったが、アレックスは安心させる様に笑顔を見せながら消えていった。その消滅したアレックスの代わりにムラクモレックスがフィールドへ着地する。

「そして系統「地竜」、「化神」を持つコスト6のムラクモが召喚された事で、スサノヲに神託！

(スサノヲ7↓8)

恐竜武神ムラクモレックス

【レベル1 B P 16000 (6000+10000) コア1】

『あのスピリットが、アマトさんのキースピリット!?!』

『この土壇場でムラクモレックスを引き寄せるとか流石だぜ相棒!!』

「ハッ！ たった1体のスピリットだけでこの盤面を崩せれると思つてんのかい!?!」

「化神スピリットは、創界神と力を合わせる事で真価を發揮する。その真価の力、見せてやる！」

アタックステップッ！ ムラクモレックス、アタックだッ!!」

七支刀と盾を打ち合い、ムラクモレックスが走り出す。

「行くぞムラクモ、スサノヲツ!! ムラクモレックスのアタック時効果、【天界放】、発揮ツツ!!」

「天、界放!?!」

「スサノヲのコア2個をムラクモレックスに譲渡ツ!

(スサノヲ8↓6 ムラクモレックス1↓3)

そうした時、ムラクモレックスのBP以下の相手スピリット、アルティメット1体を破壊する! コアが3個に増えた事により、ムラクモレックスはレベル2! オオナムチハイドラの効果も合わせてBP20000以下のピナコチャザウルスを破壊する!」

恐竜武神ムラクモレックス

【レベル2 BP20000 (10000+10000) コア3】

ムラクモレックスは進行方向にいたピナコチャザウルスを盾で突き飛ばす。それによってピナコチャザウルスは数回バウンドして破壊されてしまう。

「更に、自分フィールドに青のシンボルがある時、ムラクモレックスはターンに1回、回復する!」

「なんだい、大層な効果名の割には大したものじゃ無いじゃないかい!」

「それはどうかかな? ムラクモレックスが相手スピリット、アルティメットを破壊した事により、レベル2、3の効果が発動! あんたのライフを1つ、破壊させてもらおうツ!」

「は? ——グガアアアツ!!?」

(ライフ4↓3)

『え!? えええ!? どういう事!?!』

何が起こったのかわからない様子のモモミ。

これはムラクモレックスのレベル2、3の効果が原因である。ムラクモレックスが相手スピリット、アルティメットを破壊すれば自動的にライフを1つリザーブに置く効果を持っているのだ。

「ちいいい! けどライフが減った事によりバースト発動ッ! 『絶甲氷盾』ッ!

効果でライフを回復!

(ライフ3↓4)

更にフラッシュ効果も使ってアタックステップを終了させ——」

「無駄だ! スサノヲのレベル2の神グランフィールド域の効果! 相手はアタックステップを強制終了する事はできない!」

「何!? 面倒な効果を! だったらアルティメット・ガンディノスッ、ブロックしろ!」

ムラクモレックスの目の前にアルティメット・ガンディノスが立ち塞がる。両者が互いの得物を振り回し、激しい剣戟が繰り広げられる。

『ムラクモレックスのBPは20000! アルティメット・ガンディノスのBPは29000ッ! このままじゃあ!』

「そうさ、BPはこっちのブレイヴアルティメットの方が上! スピリットがアルティメットに勝てると思うな! 返り討ちにしてやらあッッ!!」

その言葉通り、序盤は互角だったが徐々にムラクモレックスが押され始める。だが、そんな状況でもアマトの目は死んではいなかった。

「確かにアルティメットは強い。でも、皆の力を合わせればスピリットはアルティメットにも勝る！ フラッシュユタイミングッ！」

最後の大事な仕事だ、パキケロウ！ 怒れる暴君よ！ その力を解き放ち、我が敵に滅びを与えよ！ 暴双恐龍スーパーデイルノス、パキケロウに煌臨ツツ!!

(リザーブ1「ソウルコア」↓0)

アマトとスサノヲの背後に巨大な竜の幻影が現れる。その影はフィールドで待機していたパキケロウと1つになり、2つの頭を持つスーパーデイルノスへと進化する。

暴双恐龍スーパーデイルノス

【レベル1 BP13000(3000+10000) コア1】

『あ、あいつは、あの時出てきた!?!』

「スーパーデイルノスの効果！ 系統「地竜」を持つ自分のスピリット全てのBPを10000アップさせる！ オオナムチハイドラの効果も含めスーパーデイルノス、そしてムラクモレックスのBPは20000アップする！」

「な、なんだと!?!」

恐竜武神ムラクモレックス

【レベル2 BP30000(10000+10000+10000) コア3】

暴双恐龍スーパーデイルノス

「レベル1 B P 23000(3000+10000+10000)  
コア1」

スーパーデイルノスから放たれるオーラを纏ったムラクモレックスが、アルティメット・ガンディノスが持つマーズブリンガーを叩き落とす。

「これでムラクモレックスのBPは30000！ 行けッ！ ムラクモオオオオオオオツツ!!」

アマトの声に應えるが為、ムラクモレックスは一気に距離を詰める。アルティメット・ガンディノスは負けじと火球を撃とうとするも、一瞬の差でムラクモレックスの刃がアルティメット・ガンディノスの腹部を貫き、そのままムラクモレックスは回転斬りを行う。そしてアルティメット・ガンディノスは地面に倒れ伏し爆発した。

『や、やったああ!! 凄いよ、アマ兄、ムラクモ!!』

「ば、ばかな……。アタシの、切り札が……。」

「ムラクモレックスが相手のアルティメットを破壊したのでライフを1つ。更に、スサノヲの神域のもう1つの効果！」

『系統「地竜」を持っている自分のスピリットがブロックされたバトル終了時に、相手のライフを1つリザーブに置く……!』

「正解だ、カイト。

よって合計2つのライフを破壊する!!」

「グッ！ ガア”ア” ツツ!!

(ライフ4↓3↓2)」





「あゝ、負けた負けた。ひっさしぶりに燃えるバトルだったよ!」

「下っ端共はガツカリしてんのになんてコイツは清々しい笑顔をしてんだ……。」

地面に倒れながら笑うグレン。その様子を呆れながらステイールは眺めていた。

「それで、このあとはどうしましょう? 私達が勝ったのですから何かしらイベントが起こる——」

ドドドドドドツツ——

「——あら?」

アマト達の後方から大きな振動と音が鳴り響く。すると、グレンは直ぐに立ち上がった。

「ったく。騎士団の連中、もう嗅ぎ付けたのかい。野郎共! 必要な物だけ持ってズラかるよツ!」

「「「了解ツス!!」」」」

そう言った地竜軍はアジトがあると思わしき山へ一目散に駆け出す。

「おっと、そうだった。」

「下つ端と一緒に逃げようとしたたグレンが突然立ち止まり、アマトに視線を向けた。」

「坊や、受け取りなッ！」

「え、はっ!? ちょよ!? ……なんだよコレ?」

グレンがアマトに投げ渡したのは歪な形をした短剣だった。しかしその刃は酷く錆び付いており、短剣としての機能はできなさそうな代物だった。

「昔襲った村の1つに大事に保管されてたもんさ。ま、それがどんな物かわからんし、アタシらが持つても何も起こらなかつたけどな! けど、アタシとアタシのアルティメットを打ち負かしたその実力。あんたならソレを使う資格があるかもね。」

「ちよつと待て! コレ盗品かよ!? そんな物アマトに押し付け、――って逃げんな、ババアッ!」

言うだけ言ったら直ぐに立ち去っていったグレンの背中が消えるまで眺めてると、アマトの視線の前にゲームウインドウが表示される。

「……これでクエストはクリア。で、この短剣は『特別報酬』みたいだ。」

『特別報酬』って事はレアアイテム!? 他のゲームなら最強クラスの武器が手に入るフラグだよきつと!」

「いや流石に無いと思うけどなあ。」



錆びた短剣を手元で遊びながらアマトはそう呟いた。

創界神（グランウォーカー） VS 創界神（グランウォーカー）

「——なあレン。1ついいか？」

レンを後ろからポーつと眺めながらジユンが声を掛けた。

「フラッシュタイミングは……こちらはありません。

で、なにジユン？」

「ほら昨日、クエストで特別報酬あつたら？」

「ああ、あの錆びた短剣ね。

ではそのアタックはライフで受けて、バースト発動、『絶甲氷盾』効果でライフを1つ回復し、フラッシュ効果も使用します。このバトル終了後、アタックステップは終了します。

んで、その短剣が何？」

「あの後独自に調べただけどよ、どうやらお前以外に例の短剣をゲットした奴は今のところ存在しないみたいだぞ。」

「え、そうなの？」

あ、スタートステップ。

コアステップ。

ドローステップ。

リフレッシュステップ。

メインステップ。フム——」

「あら、レンくんはジユンくんじゃなあい。こんな早い時間にカードシヨップでデート？」

レンが手札とコアの数を考えて戻ろうとしたら1人の女の子が声を掛けてきた。

彼らが振り返るとそこにはよく知る2人が立っていた。1人は黒髪のロングヘアー、もう1人は茶色の髪をツインテールにしている綺麗な女の子達だ。

「シオリ、ヒトヨ。おはよ。」

黒い長髪の女の子の名は『風晴シオリ』かぜはれ。ツインテールの女の子は『奏宮ヒトヨ』かなみやという名である。

「おはようレン、ジユン。」

「オウ。で、何処をどう見たらデートだと思った腹黒女。」

「ひどくない！ ジユンくんってどうしていつもわたしの事を『腹黒女』だなんて言うのお？」

「自分の胸に手を当てて聞いてみな。」

「胸を？ うくん？ (ムニムニ)」

「あら、これってセクハラ？」

「違うわ！ 『当てろ』と言ったのに何で揉む!? これだからお前は——」

「……。それでレン、目の前で今にもブチ切れそうな人とどうしてバトルしてゐるの？」

ジユンがヒトヨに怒鳴ってる間に、シオリはレンに状況を説明する様に頼んだ。因みにそのレンは大量の手札をシャツフしながらブツブツと計算している。

「何か『道場破り』らしい。」

「道場破り？　ここで？　何で？」

「さあ？　俺達が来た時にはもう居て、『バトルスペースを占領されたから何とかして』って店長に頼まれて今に至る。」

レンが指差す場所には気弱そうな顔見知りの店長が隠れながら見守っていた。

「オイテメエ、サツサとりザインしろ！」

アタックしないでドロージャコアブばっか！　チンタラターンを稼いだところでお前の負けは確定してんだよ！」

道場破りに来た男の盤面は確かにスピリットのカードが何枚も並んでいる。それに対しレンの方はネクサスが多く、しかも色やシンボルもバラバラ。ライフも男は5、レンは2だけとフィールドの情報だけなら確かに男の方が優勢であった。

——フィールドだけならば。

「んん……掛けるか。」

『テツポウナナフシ』を召喚。召喚時効果、手札を全て破棄して相手の手札と同じ数だけドロージャコアブします。」

「手札交換だと？　それだけ手札があるのに事故って……た？」

男はレンの手札を確認すると言葉を失った。

『光龍騎神サジツト・アポロドラゴン（RV）』に『獅機龍神ストライクヴルム・レオ（RV）』、『白羊樹神セフィロ・アリエス（RV）』だと!？」

「それ以外の十二宮Xレアもトラッシュユに落とすなんて、思い切った事をしたね。」

『十二宮Xレア』とは黄道十二星座をモチーフにしたカードの事であり、強力な効果を持つ物が多い。それを簡単に手放した事に驚きを隠せないヒトヨと男。だがその理由は直ぐに分かることになる。

「——」。デツキあと何枚ですか？」

「はっ。」

手札を入れ替え、あるカードを確認したレンは男にデツキ枚数を訪ねた。

「に、20枚だが？」

「了解。それじゃあフル軽減、6コスト。

——『光魔神』召喚。」

「…………。——はあツツ!!?!」

「召喚時効果。自分のデツキを全て破棄。そしてトラッシュユから系統「神皇」を持つスピリットを12体までノーコスト召喚する。

まずは『光龍騎神サジツト・アポロドラゴン（RV）』。次に『金牛龍神ドラゴニック・タウラス（RV）』。他は——」

次々と高コストの十二宮Xレアを召喚し続けるレンの姿を呆然と眺める男。

「最後に『天秤造神リブラ・ゴレム（RV）』を召喚し、リブラ・ゴレムとサジット・アポロドラゴンに光魔神を合体<sup>ブレイヴ</sup>。

アタックステップ。リブラ・ゴレムでアタック。アタック時効果で系統「神皇」を持つ自分のスピリット1体につき相手のデッキを上から3枚破棄。今12体いるので合計36枚、よってデッキ全てを破棄して下さい。」

デッキアウト——

バトスピではデッキからカードを引けなくなるとその瞬間、敗北が決まってしまうのだ。

「わあ、すつごおしい。あつという間に形勢逆転じゃない。」

「やられた側に同情するぜ。優勢だったのがいきなり劣勢にかわるんだから。」

「それ、経験談？」

「……デッキアウトされたよ。で、デッキ破壊対策して再戦したら、今度は『ドラゴニック・タウラス（RV）』に『エクゼシード』の【走破】を付与させて2桁のライフ貫通でワンパンされたわ。」

「ジュン、2桁のライフ貫通なんてそうそう起きないし、ある意味良い経験したんじゃない？」

「良くねえわ！」

「なんの話をしてんの？」

ジュン達3人の会話にバトルを終えたレンが割り込んで来た。

「あらレンくん、バトル終わったの？」

「途中まで見てたよね？」

レンが親指で後ろを指すと机に突っ伏してる男の姿があった。

「デツキを全て破棄させて勝ったよ。」

「でも凄かったわ！ 光魔神を実際に召喚する人なんて見た事なかったもの。」

「——言われてみれば、俺以外に使ってるの見た事ないな。」

「言われなければ気付かなかったのか……。つか、よくそんなロマンデツキを作ろうと思ったな。」

ジュンの台詞にレンは一言——

「楽しそうだから。」

とだけ答えた。

「そんな理由で毎度毎度、試作デツキの試し相手にさせられる俺の身を考えた事あるのか!? この前は3ターン目で『ラグナ・ロック』を召喚するデツキを作りやがって!」

「やだ、鬼畜なデツキじゃない。」

「人が色々と考えたデツキにそんな感想はくない？」

「男の子って女の子に蔑まれるのが好きなんでしょ？」

「それとこれとは話が違うよ。」

「蔑まれるのが好きって事は否定しないのか!？」

そう吠えるジュンだが――

「え、だってジュンが持つてるDVDの中にそういう事をするのもあるだろ?」

「ちよツツ!?!」

その直後にレンが思いもよらない爆弾発言をした。

「……ジュン。」

「それは流石にわたしも引くわ……。」

「違う! アレは知り合いが勝手に置いていった物で――

だーくそツ! ちよつと来い!!」

レンの首元を掴み、ジュンは店から出る。

「ま、まさか! ジュンくんってそっちの方がお好みなの!？」

「キヤー、タスケテー。」



「黙つとれ腹黒女！ レンも棒読みでおかしな事言ってるじゃねえ！」

「何やってるんだか。……フフツ。」

呆れながらもどこか楽しげに笑いながらシオリは3人の後を追った。



『B.S. O』内のある噴水広場前――

「整れーつ、番号始め！」

「いーち。」

「2。」

「よーくん♪」

「……？ 総員4名、イジョーなーし。」

「異常アリだろ!! なんで1人増えてんだよ!？」

B.S. O内でステイルの大声が響き渡る。今、どういう状況なのか簡潔に説明すると――

まず現実世界でジュンがレンに『B.S. Oに來い。』と言われ、彼は渋々ログインした。そして集合場所へ向かうと何故かシオリとヒトヨも来ていたのだ。因みにだが、シオリは髪の色を黄色にし、帽子に

パーカーなどボーイッシュな服装をしておりゲームネームは『クシナ』。ヒトヨは逆に女性らしいゆつたりとした服で髪を緑色に変え、ゲームネームを『セラ』にしている。

尚、2人とも来た理由は——『暇だから。』、らしい……。

「それでステイール、こっちの世界に来た理由は？」

帽子の位置を調整しながらクシナが尋ねる。

「2つある。1つはアマトがゲットした短剣の情報を探す。」

「この短剣な。」

アマトは短剣を取り出しクシナとセラへと見せる。

「でも肝心の情報はどうやって探すつもりなの？ 闇雲に行動するのは効率が悪いでしょ？」

「こういう時、重要な情報をいち早く確保する人らがいるだろ？」

「いらっしゃ——って、あらやだアマト君達じゃなあい!? 久しぶり〜!」

居酒屋のような店に入ったアマト達を出迎えたのは、オカマ口調で話すガタイの良い人物であった。

その人の名は『マリア』。『乙女の園』と呼ばれる店を運営しており、『愛の伝道師』を名乗っている者だ。

「こんにちは。」

「ども。」

「アップデート前以来ですね、マリアさん。」

「お久しぶりで〜す。」

アマト達はそれぞれの言葉で返答する。その様子を見てマリアは満足そうに頷きながら開いてるカウンター席に座るように4人を促した。

「もう、アップデートが終わったというのにあなた達が来なくて心配してたのよ。あ、飲み物は何にする？ お姉さんからのお・ご・り☆」

「それじゃあコーヒーを。砂糖も1つ。」

「私はコーラで。」

「…………。あー、なら俺もコーラ。」

「この時、ステイールは思った。

『お姉さん』？ 『おっさん』の間違いだろ？ ——と。」

「おいセラ！ 人の考えを勝手に読m——

ゴチンツツ!!!

「あ、私は紅茶をお願いします。 (ニコニコ)」

「は〜い！ 喜んで〜！」

(……悪女がいる。)

店内に鈍い音が鳴り響くと、頭に大きなたんこぶができたステイールがカウンターに突っ伏していた。



「そのクエストはアタシも受けたわ。アルティメットだけでも驚いたのにマーズブリンガーは流石に想定外よ。」

「聞いただけでもほぼ詰みだとわかるのによく勝てたね。」

「正直、自分でも分の悪い賭けだと思ったよ。」

出された飲み物を各自飲みながら、先日のクエストの内容をアマトは説明していた。

「それで、この特別報酬が一体何なのかって話ね。」

「ごめんなさい、アタシもまだわからないわ。クエストは何度か受けてクリアしたんだけどこの短剣はゲットしてないのよ。」

「そっか、マリアは情報屋で一番信用できるから何かわかるかと思っただんだが。」

「アテが外れちゃったみたいね。……ところで、ステイールくんは何時まで頭を抱えながら黙ってるの?」

「ほお……。だーれのせいなのかわかんねえとも言うつもりか腹黒

陰険陰湿悪女が!!」

「あーもー、マリアさんの店で暴れちゃあダメでしょ。」

「というかセラの性格に『陰湿』は含まれないと思うのは俺だけか?」

セラに掴みかかろうとするステイールをアマトとクシナが宥めようとする。その光景を見ていたマリアが、何か思い出したかのように手を叩いた。

「そうだわー! アップデートで追加された街に行ってみてはどう?

そこなら何かわかるかも知れないし、短剣の本来の持ち主のNPCがいるかもしれないわよ。」

マリアの言葉にステイールをクシナと2人がかりで抑えていたアマトが考え込む。

「そっか。そういえばまだ新しい街には行ってないからそこで探すのもアリか。よし、それじゃ今から行くか?」

「さて。その前にやる事がもう1つある。マリア、地下のバトルフィールドを貸してくれ。」

「あら? 貸すのは別に構わないんだけど、異世界風のフィールドじゃダメなの?」

「あつちのフィールドでも構わないんだが、それだと周りの人に観られるだろ?」

そう言っただけステイールはアマトに視線を向ける。その仕草で何を言いたいのかアマトは直ぐに気づいた。

「何だかんだでステイールもバトル狂だな。」

「うっせえ。で、返事は？」

ステイールの言葉に、アマトは答えず不敵な笑みを浮かべた。

——乙女の園・地下スタジアム

「ねえ、どっちが勝つか賭けてみる？」

「いいね。じゃあ私はアマトに自販機のジュース一本。」

「それじゃあ私はステイールくん、コレ。」

セラがクシナに両手を広げて見せる。

「10、って少ない？」

「その、い・ち・ま・ん・倍♪」

「OK、乗った！」

「ちよおつと待ちなさい！ アタシの目が黒いうちはそんな不当な賭け事は許さないわよ！ ってセラちゃん、貴女そんな大金持つてんのツツ!？」

観客席で並んで座る3人を尻目にアマトとステイールは準備を進めながら会話をしていた。

「こうやってお前と戦うのは何回目だ？」

「100ぐらいから数えるのを止めたからなあ。実際どのぐらいだろうね。」

「ま、どうでもいいか。この前はお前に美味しい場面を取られた上に、俺も俺のデツキらもあのリーダーと戦えなかったから不完全燃焼なんぞでな。」

「だから完全燃焼させる相手に俺、ってか。まあ普段試作のデツキ相手にしてもらってるから構わないさ。」

「それでこそ俺の相棒兼ライバルだ。」

互いに笑いながら準備を終わらせ、同時にコールをあげる。

「ゲートオープン、界放ツ!!」

するとスタジアムのフィールドが輝き出し、アマト達がいる場所の雰囲気だけが一瞬にして変わった。

「そうだマリアさん。お店、空けて大丈夫ですか？ オーナーですよね？」

「他の店員に任せているから気にしないで。それに見たかったのよアタシ。」

少数精鋭ギルドで有名な貴女達——『ACCES』のリーダーとそのライバルのバトルを、ね。」

『ギルド』とは、他のゲームでもあるゲームプレイヤー達の集まりの

事。『BS・O』内では基本、少なくとも10人ぐらいで結成するのが普通であるが、アマト達『AKUSES』は4人だけという異端の存在だ。だがその4人だけで大きなイベントや大会で好成績を数多く残しており、中堅プレイヤー以上の間で知らない者は少くない。

——閑話休題

「先行は貰う。スタートステップ。」

ドローステップ。(手札4↓5)

メインステップ。ネクサス、『スサノヲの轟天神殿』を配置。

(リザーブ4↓0 手札5↓4)

バーストをセットし、ターンエンド。

(手札4↓3)」

「へえ。スタートステップ。」

コアステップ。(リザーブ4↓5)

ドローステップ。(手札4↓5)

メインステップ。初ターンで轟天神殿にバーストとは良い出だしじゃないか。」

「そんな事を言うって事はそつちも良い手札なんだろう?」

「そういうこつた。いくぜ! 白き守護神、グランウオーカー創界神クリシユナを配置!

(リザーブ5↓3 手札5↓4)」

ステイルの背後に光が集まる。その光は金色の長髪に褐色の肌が特徴の男へと化した。

「先に創界神を配置できたのはステイルね。」

「配置時の神託コアチャージを發揮! デッキを上から3枚トラッシュに!」



ステイールのデッキからトラッシュへ置かれたのは以下のカード達だ。

クリシユナーガ・サトラエ

【コスト3 系統「甲竜」】

障壁しょうへきのクリシユナーガ・サツタル

【コスト3 系統「天渡」【甲竜】】

クリシユナーガ・パチャース

【コスト4 系統「甲竜」】

「オールヒットッ！ 落ちたのが対象のコスト3以上の系統「甲竜」、

「天渡」を持つスピリット3枚！ よって3チャージ！

(クリシユナー0↓3)

で、本来ならこっからスピリットを召喚したいところだが、轟天神殿が厄介だな。」

『スサノヲの轟天神殿』は系統「地竜」、「海首」を持つ自分のスピリット全てに相手の効果でフィールドから手札、デッキに戻らない様にする効果を持っている。そしてステイールが使う白のカードはスピリットを手札やデッキに戻す効果が最も得意なのである。

つまり『スサノヲの轟天神殿』が存在する間、ステイールのカード達は効果を活かしきれないのだ。

「つー訳で、こいつの出番だな。クリシユナはシンボルを白としても扱える。よって軽減を1つ満たしてマジック、『メビウスリング』を使用！

(リザーブ3↓0 手札4↓3)

お前のネクサス、轟天神殿をデッキの下に送るぜ！」

「——ッ！」

アマトの頭上に穴が空き、フィールドに展開されてた轟天神殿が崩壊しながらその穴に吸い込まれてしまう。

「この効果でネクサスを戻せたらボイドからコアを1つ、俺のトラッシュに追加し、最後にこのカードはフィールドに置かれる。

(トラッシュ5↓6)

これでターンエンドだ。」

お互いに最初のターンを終えたが、現状では圧倒的にステイールの方が優勢である。

「(マズいな。轟天神殿を除去されたのはとても痛い。)

スタートステップ。

コアステップ。(リザーブ0↓1)

ドローステップ。(手札3↓4)

リフレッシュステップ。(リザーブ1↓5)

メインステップだが……仕方ない、これ以上遅くなるのはいけないからな。創界神ネクサス、創界神サノヲを配置！ 同時に神託も発揮する！

(リザーブ5↓3 手札4↓3)

1ターン遅れてアマトもサノヲを出し、そのまま神託でデッキから以下の3枚がトラッシュへ置かれた。

ゴッドシーカー パラサノカンナギ

【コスト3 系統「地竜」】

シロイワノハイドラ

【コスト3 系統「天渡」【海首】】

恐龍武神ムラクモレックス

【コスト6 系統「化神」【地竜】】

「んん？」

「こちらも対象カードは3枚、よってスサノヲにコアを3つ置く。  
(スサノヲ0↓3)

そしてトラツシユのシロイワノハイドラの効果発揮！ スサノヲの神託でデッキからトラツシユに置かれた時、コストを支払わず召喚できる。来い、『シロイワノハイドラ』ッ！

(リザーブ2↓1)

アマトのフィールドに現れたのは、その名の通り白い岩の様な鱗に覆われた双頭の竜だ。

シロイワノハイドラ

【レベル1 BP3000 コア1「ソウルコア」】

「そして神託対象が召喚された事でスサノヲに神託！  
(スサノヲ3↓4)」

「おいおい、そんなスピリット入れてなかったよな？」

「いつも同じ構築だと思ふなよ。アタックスステップ！

シロイワノハイドラでアタック！」

アマトの指示に従い、シロイワノハイドラが走り出す。

「ライフで受ける！ ——ツツ!!

(ライフ5↓4)

召喚して早々ライフを削るか。」

「コアもバーストも無いからな。ターンエンド。」

「けど、ムラクモレックスがトラツシユに落ちたのは残念だったな。

スタートステップ。」

「……………」

「コアステップ。(リザーブ1↓2)

ドローステップ。(手札3↓4)

リフレッシュステップ。(リザーブ2↓8)

メインステップ。

(で、どうするか。一番気になるのはバーストだが。)」

アマトの場にセットされている1枚のカード——バーストは発動条件を満たす事で強力な効果を発揮する。逆を言えば発動条件を満たさなければ何時までも発動する事はない。

「(アマトのデッキにあるバーストは4種類。その中で条件が「ライフ減少後」のバーストは3つ。最初のターンでコアを使い切ってもセットした事を考えれば、「ライフ減少後」のバーストである可能性が高い。)

なら今は場を整えるのを優先するか！

『クリシユナーガ・サトラエ』を召喚！

(リザーブ8↓5 手札4↓3)」

ステイールが最初に召喚したのは戦闘機に似た頭部を持つ機械的な竜だ。

クリシユナーガ・サトラエ

【レベル1 BP3000 コア1「ソウルコア」】

「系統「甲竜」を持つスピリットを召喚した事でクリシユナに神託！  
(クリシユナ3↓4)

そしてサトラエの召喚時効果！ 相手の手札、手元のカード3枚に

つき、ボイドからコアを1つ追加する。お前の手札は3枚ピッタリだから1個追加だぜ！

(サトラエ1↓2)

クリシユナーガ・サトラエ

【レベル2 BP5000 コア2 「ソウルコア」】

コアが増え、レベルが上がったサトラエは力強く咆える。

「次は『ゴッドシーカー コル・ハープル』を召喚する！

(リザーブ5↓3 手札3↓2)」

クリシユナーガ・サトラエの隣に首が長い白竜が現れる。

ゴッドシーカー コル・ハープル

【レベル1 BP3000 コア1】

「クリシユナに神託し、コル・ハープルの召喚時効果！

(クリシユナ4↓5)

デッキを上から4枚オープンし、そこから『創界神クリシユナ』1枚と、系統「天渡」、「化神」、「インディーダ」を持つ白のカードをどれか1枚を手札に加える。頼んだぜ、コル・ハープル！」

コル・ハープルが高い声で鳴くと、ステイルのデッキから4枚のカードがオープンされる。

クリシユナーガ・リグ・ガンナ

【天渡・甲竜】

神龍<sup>しんりゅうこうてき</sup>甲笛バガヴァット・ギター

【<sup>サーガ</sup>神話・神装・天渡】

クリシユナーガ・パチャース

【甲竜】

## ドリームビーム

「おしー！ 今回手札に加えるのはバガヴァット・ギターー！ そして『ドリームビーム』の効果！」

コル・ハープルの効果でオープンされた時、手札に加えられる。この効果で手札に加えた時、ボイドからコアを1つ、俺の創界神に置く。これでクリシュナにはコアが6個乗る！

(手札2↓4 クリシュナ5↓6)

ステイルは順調にコアと手札を増やしていくが、それを待つてたかのようにアマトの口が開かれる。

「相手の『このスピリット召喚時』発揮により『カムナビノミコト』のバースト発動ッ！」

セットされていたアマトのバーストが開かれた事にステイルは驚きの声を上げた。

「なッ!? 召喚時バースト!?!」

「バースト効果により、コスト8以下の相手スピリット1体を破壊する。コル・ハープルを破壊する！」

アマトのフィールドに水球が現れ、そこから5本の水のレーザーが放たれる。そのレーザーは次々にコル・ハープルの体を貫き、切り裂いていった。

「この効果で破壊に成功すればボイドからコアを2つ、系統「地竜」、「海首」を持つ俺のスピリットに置く。よってシロイワノハイドラにコアを2つ追加する！」

(シロイワノハイドラ1↓3)

そして『カムナビノミコト』をバースト召喚！ 並びにスサノヲに神託！

(リザーブ1↓0 スサノヲ4↓5)

水球の中から和風の鎧を身に着けた5つの首を持つスピリットがゆっくりと歩きながら現れた。

カムナビノミコト

〔レベル1 BP8000 コア1〕

「サトラエの時に発動しなかったのはバーストで確実に破壊するのを狙ってたわけか……。」

『クリシユナーガ・サトラエ』はレベル2になると、【重装甲？ 赤／青】を得る。その効果で赤と青のスピリット、ネクサス、マジック、ブレイヴの効果を受け付けないのだ。

「言ったよね、同じ構築だと思っただけ。」

「まったく、おかげで色々と計算を狂わされたぜ。なら今度はこっちがバーストをセット！」

(手札4↓3)

最後に神話ブレイヴ、『神龍甲笛バガヴァット・ギター』をクリシユナに直接合体ダイレクトブレイヴッ！

(リザーブ4↓2 手札3↓2)

上空から銀色の横笛が出現し、クリシユナがその横笛を手にする。

「クリシユナの神託条件には白の系統「神装」ブレイヴも含まれる。よってクリシユナに神託！」

(クリシユナ6↓7)

アタックステップは何もせず、このままターンエンドだ。」

「了解、スタートステップ。」

コアステップ。(リザーブ0↓1)

ドローステップ。(手札3↓4)

リフレッシュステップ。(リザーブ1↓4)

メインステップ。スサノヲのシンボルを赤として扱い、追加されたシロイワノハイドラのコアで、デイモルフオノスケを召喚！

(シロイワノハイドラ3↓1 手札4↓3)

デイモルフオノスケ

【レベル1 BP3000 コア1】

「スサノヲに神託と、召喚時効果の【連鎖<sup>ラッシュ</sup>】発揮ッ！ ボイドからコアを1つ追加。」

(スサノヲ5↓6 デイモルフオノスケ1↓2)

緑色の翼竜に似た姿のデイモルフオノスケが召喚され、アマトも順調にコアを増やしていく。

「ステイール。さっきムラクモが神託でトラッシュに置かれた事を残念って言ってたよな？」

「ああ、それがどうした？」

「俺としては、逆に好都合だったんだよ。マジック、『エクスキャベーション』を使用！

(リザーブ4↓2 手札3↓2)

アマトが1枚のカードを取り出すと、トラッシュにある『パラサノカンナギ』、そして『ムラクモレックス』がそのカードと共鳴し合う。



『エクスキャベーション』はトラッシュユにある系統「地竜」を持つスピリットカード3枚までを手札に戻す効果！ よって『ゴッドシーカー パラサノカンナギ』、『恐龍武神ムラクモレックス』の2枚を手札に戻す！

(手札2↓4)

「なるほど。そのカードを握っていたから神託でムラクモレックスがトラッシュユに置かれてもアマトは焦らなかつたのね。」

「おまけにキースピリットを召喚できるだけのコアもあるし、このままじゃあステイルくん逆に追い込まれちゃうわよ？」

「はっ！ 寧ろ望むところって言ってやら！ よーく見とけよセラ！」

「フフ、青春ねえ。」

「……………。続けていい？」

「…あ、どうぞ。」

軽いため息をつき、アマトは表情を固めた。

「来たれッ！ スサノヲの赤き半身ツツ!! その強靱なる力を持って、我らの敵全てを薙ぎ払え！」

召喚、化神スゴッドピリット、『恐龍武神ムラクモレックス』ツツ!!!

不足コア確保のため、デイモルフオノスケのコアを全て外し、スサノヲに神託!

(リザーブ2↓0 手札4↓3 デイモルフオノスケ2↓0 スサノヲ6↓7)

スサノヲの体から生み出されたシンボルから、アマトのキースピリットであるムラクモレックスが現れる。

代わりに維持コアが無くなったデイモルフォノスケは他のスピリット達に応援する様に声を上げながら消えてしまった。

恐竜武神ムラクモレックス

【レベル1 BP6000 コア2】

「(で、これまでの動きでバーストが発動しなかった事は、【アタック後】か【ライフ減少後】だろうな。)

ま、攻めない選択肢は無いけどな。アタックステップ！  
ムラクモ、アタックだツ!!」

七支刀の切っ先を向け、ムラクモレックスが走り出す。

「ムラクモレックスのアタック時効果、【天界放】発揮ツ！

スサノヲのコア2個をムラクモに譲渡！ ムラクモはレベル3となり、自身のBP以下の相手スピリット、アルティメット1体を破壊する！

(スサノヲ7↓5 ムラクモレックス2↓4)

恐竜武神ムラクモレックス

【レベル3 BP13000 コア4】

ムラクモレックスが口から赤い衝撃波をクリシュナーガ・サトラエに向けて放つ。が、クリシュナーガ・サトラエのボディにある赤い線が輝き自身の周囲に赤いバリアが展開され、衝撃波から身を守った。

「サトラエは【重装甲？赤】でムラクモレックスの効果は受けない！」

「でも【天界放】の効果はまだ続いてる！ 青のシンボルがあるためターンに1回、回復し、相手の創界神のコア2個をボイドに置く！」

「チイツ、確かにそんな効果も持ってたな！」

（クリシュナ7↓5）」

ムラクモレックスが放つ赤い衝撃波はステイルの後ろにいるクリシュナへとダメージを与える。更に、その衝撃波の影響はアマトのあるスピリットにも与えていた。

「カムナビノミコトの効果！」

【天界放】を發揮した自分のターンの間、相手は手札、手元、バーストのスピリットカードの効果を發揮する時、2コスト余分に支払わなければ發揮できなくなる！」

ムラクモレックスの咆哮に呼応し、カムナビノミコトも天高く咆える。2体の調和によってステイルの手札、バーストカードが青い光に包まれてしまう。

「そしてこれがメインのアタック！」

「ムラクモレックスのアタックはライフで受けるぜッ！」

（ライフ4↓3）」

七支刀で斬り付けられステイルのライフが1つ減らされる。

「へへ、ライフが減った事でバースト発動ッ!!」

バーストはスピリットカードなのでリザーブのコアを2つ支払い、相手スピリット3体を手札に戻す！

（リザーブ3↓1）」

「——くッ！」

(手札3↓6)」

シロイワノハイドラ、カムナビノミコト、そしてムラクモレックスの3体が一斉にアマトの手札に戻されてしまい、アマトのフィールドには何もいなくなってしまうた。

「この効果発揮後、こいつをバースト召喚する！ 『クリシュナーガ・アルテイス』ッ！」

(リザーブ1↓0)」

上空から高速で人型の甲竜——クリシュナーガ・アルテイスが飛来する。

クリシュナーガ・アルテイス

〔レベル1 BP5000 コア1〕

「神託対象が出たのでクリシュナに神託する。

(クリシュナ5↓6)」

「……これは流石にターンエンドだな。」

アタックできるスピリットが存在しない以上、アマトにできる事はなかった。

「スタートステップ。

コアステップ。(リザーブ0↓1)

ドローステップ。(手札2↓3)

リフレッシュステップ。(リザーブ1↓8)

そしてメインステップ！ さあて、派手に行くか！

出て来い！ クリシュナの化神スピリット！

大いなる翼持で、白金の龍！ 『神撃甲龍ジャガンナート』、レベル2で突撃ツツ!!

(リザーブ8↓2 手札3↓2)

クリシユナの体から白のシンボルが現れた瞬間、ステイルのフィールドが数多の氷山に覆われ、その中でも一番大きい氷山の中に封印されてるかの様に眠る龍がいた。そんな龍に白のシンボルが吸い込まれるように入っていく。

すると氷山が震えヒビが入り、巨大な龍がフィールドの氷諸共、氷山を砕きながら動き始めた。

神撃甲龍ジャガンナート

【レベル2 BP10000 コア3】

「——やはり持ってたのね。ジャガンナートを。」

「当然だ。クリシユナに神託。

(クリシユナ6↓7)

次にクリシユナのバガヴァット・ギターをジャガンナートに合体！」

クリシユナの手元から離れたバガヴァット・ギターが変形、巨大化し、ジャガンナートの両翼の付け根に収まる。

神撃甲龍ジャガンナート「ブレイヴスピリット」

【レベル2 BP15000 (10000+5000) コア3】

「アタックステップ！ 行け、ブレイヴジャガンナートツ！」

ジャガンナートが飛翔し、アマト目掛けて突っ込む。

「ジャガンナートのアタック時効果、【界放】発揮!!」

クリシュナのコアを3つジャガンナートに置く事で、相手の手札、手元のカード合計3枚につき、白のシンボルを1つ追加する! アマト、お前の手札は6枚! なのでシンボルを2つ追加する!

そしてジャガンナートはレベル3にアップだ!

(クリシュナ7↓4 ジャガンナート3↓6)

神撃甲龍ジャガンナート「ブレイヴスピリット」

【レベル3 B P 2 1 0 0 0 (1 6 0 0 0 + 5 0 0 0) コア6】

「更にジャガンナートレベル2、3の効果! ボイドからコアを2つ、自身か系統「インテイナーダ」を持つ創界神に置く事でブロックされなくなる。今回はクリシュナに置いてアンブロッカーにする!」

(クリシュナ4↓6)

そしてフラッシュユタイミング! クリシュナの神グランスキル技を発動! ク

リシュナのコアを3つボイドに置く事で系統「甲竜」を持つ自分のスピリット1体を回復させる! 当然ブレイヴジャガンナートを回復させるぜ!

(クリシュナ6↓3)

クリシュナから力を与えられジャガンナートはさらなる高みへと上がっていく。

「ブレイヴジャガンナートはクアドラプルシンボル! このアタック、どうする!」

「——ライフだ!」

ジャガンナートは口から白い雷を纏った光線をアマトへ放つ。

「グガア”ア”ア”アアツツツ!!!」

(ライフ5↓1)

一度に4つもライフを削られ、アマトは思わず膝を付いてしまう。

「ハア、ハア、流石に、ライフを4つ持つてかれるのはキツイな……。」

「——この勝負、アマト君の負けね。」

マリアの一言は当たっていた。

この場面。アマトが勝つためにはジャガンナートのアタック中に防御マジックを使うべきだった。それをしなかった、という事はアマトの手札にはジャガンナートを対処できるマジックが無かったという訳なのだ。

「どうだ？ リザインするか？」

挑発するステイールに対し、アマトはふらつきながら立つが、その表情に陰りはなかった。

「生憎、俺は自分から負けを認めない主義だ。例え負けが確定してるとわかっててもな！」

「ハッ！ だよな。」

だからこそ、直接引導を渡してやる！ ブレイヴジャガンナートツ！ ラストアタックツツ!!」

両翼を広げ、再びジャガンナートが飛び立つ。そして口元に白い雷を迸らせる。

「ライフで受けるッ！」

両腕を広げたアマトにジャガンナートは容赦なく光線を放ち最後のライフを破壊した。



バトルを終えた後、アマト達4人はマリアの店を出て当初の目的だった短剣の情報があるかもしれない街へと向かおうとしていた。  
が――

「目的地までどう行く？ やっぱ徒歩？」

「嫌よ！ 足が棒になっちゃうじゃない！」

現在、目的地までの移動手段で揉めていた。

「どうした腹黒女。ちよつと歩くだけでバテちゃうって言いたいのかあ？」

「あなた達が体力オバケなだけですう！」

「でも徒歩以外になると馬車ぐらいしかないし、その馬車もアップデート後の新要素にいろんな人達が使っているだろうから取り合いになるかも。」

「……リムジンを持ってきましょう。」

「世界観壊しても歩きたくないのかお前は!？」

「そもそもゲームなんだから疲れたりしないんじゃないんじや……。。」



4人が頭を悩ませていたその時だった。

「ぬわああっハッハッハッ!! お困りのようだねその少年少女諸君!!」

突然の大声に反応し4人が振り向くと、そこにいたのは奇抜なサングラスにマントを着けた変人がいた。

((誰!?!))

4人中3人が全く同じ反応をする中、残った1人がため息を吐きながら言った。

「妹よ。いくらゲームとはいえそんな格好をした変人の親族として言わせてくれ。……今までありがとう、そしてさようなら。」

「ちよちよちよちよちよつとまって!? やめて!? こんなかわいい妹を見捨てないでアマ兄つつ!!」

奇抜な服装を脱ぎ捨て、涙目でアマトの足に縋り付いた者はメイだった。

「は? メイだと? なんでここにいんだ?」

「あの人、僕達もいます。」

メイに遅れて現れたのはカイトとモモミの2人だった。

「……? 君たちは?」

「アマトくん達と一緒にクエストを受けた子達。カイトくんともモミちゃんね。」

「…………。なあセラ。アマトは2人の名前言ってなかった気がするんだが、いつ知った？」

「ウフフ♪」

セラはステイールの疑問に笑顔だけで答えた。

「まあカイト達は一旦置いて。メイ、なんでさっきのダサイ変装をしてまで声を掛けた？」

「一言余計だよも〜。」

文句を言いながらメイはある場所を指差す。そこにあっただのは大きな馬車が1つあった。

「皆さん、一緒に乗ってく？」

## 妖魔の夜行

ゴレムタウン――

ここは鍛冶が盛んな街。あちらこちらで鉄を打つ音や機械音が聞こえてくる通称、『鍛冶の街』である。そんな街にアマト達は訪れていた。

「うわあ……。とても賑やかですね。」

「新規エリアってのもあるだろうが、この街自体がそういう設定にされてるんだろうな。」

物珍しそうに周りを見渡すカイトとステイル。その後ろでアマトはメイに気になっていた事の説明を受けていた。

「要するに昨日解散した後、カイト達と一緒にいたら意気投合して今日もパーティーを組もうって話になったのか。」

「まあそんなところ。アカリちゃんとミヨちゃんはリアルや自分達のギルドがあるし、1人じゃつまんないから誘ったんだ！」

「そういえば、メイちゃんは他のギルドに入る気はないの？」

2人の話を聞いてたクシナがふと思った事を口にする。

「ギルドに入るのも面白そう、とは思っただけど、『コレ！』って感じのギルドがないから。」

「メイちゃんの場合、目標を高くしすぎてるのがダメと思うわ。だっ

てアマト君がいるわたし達やお姉さんのギルドを目標にしてるんでしょう?」

「え? あんたら姉がいんの?」

セラの言葉に耳を疑ったモモミがアマト達に尋ねた。

「言っただけでなかったっけ? 俺から見て2つ上の姉がいるぞ。」

「すっごく美人でかわいいし、スタイルも頭も良くてとても優しい傲慢の姉なんだよ!」

(この2人の姉って一体——。)

片や初対面の人には冷たく接し、ぶっきら棒で毒舌な男。片や表情がコロコロ変わり、無鉄砲かつやんちゃな少女。

「……………」

「何か失礼な事考えてるようだけど、俺達の姉はいたって普通だからな。大学に通ってるから今は別居してるけど。」

アマトは姉の人物像が想像出来ない様子のモモミを見て軽い説明をする。その話を聞いてたカイトがある疑問を投げ掛けた。

「アマトさんのお姉さんだから、やっぱり強いんですか?」

「強いわ、とても。私も何回か勝負してるけど負けの回数が多いから。相手のペースに飲まれずに自分のやりたい事をする、って感じの——あれ?」

クシナが質問に答えてる途中で何かを見つけたようだ。その視線の先にはある店の前でウロウロしながら悩んでいる様子の女性がいた。

「あの人ナツカゼさんじゃない!？」

「あら？ 知り合いなの?」

「いやアタシが一方的に知ってるだけなんだけど……。」

このゲームでナンバーワンのギルド、『風鈴華山』ふうりんかざんのサブギルドマスター。アタシの憧れの人で、ナツカゼさんのバトル動画をリアルでよく見てるの。話した事は無いけど。」

頭を掻きながらセラの質問に答えるモモミ。

「ふくん。それじゃあ一言話してみる?」

「はあ!? ちよ、ちよっと待ちなさいよ! アタシ如きが話しかけて良い相手じゃないでしょ!？」

「安心しろ。そんな事気にしない人だし、つーか俺らの知り合いだろうが腹黒女。」

「へ?」

そんな会話をよそにアマトとメイはナツカゼと呼ばれた女性の元へと向かっていく。

「ナツ姉。何してんの?」

「ふえ?」

「ナツ姉〜、おひさ〜！」

「わあ！ アー君にメイちゃん！ おひさ〜。」

難しそうな顔から一変し、満面の笑顔になったナツカゼ。  
そう。彼女こそアマトとメイの実の姉であるのだ。

「こんなところで何を……『オリジナルパック店』？」

ナツカゼが立っていた店の看板に書かれていた文字をアマトは無意識に読んだ。

「リアルに例えたらオリカだよ。店ごとにレアカードが違ってて、ランダムに封入されてるの。」

「へえ。で、何パック買って爆死したの？」

「アー君、決めつけはダメ。」

「じゃあ欲しいカード当たったんだ？」

「……………」

「目を反らした時点で察するけど。」

「えへへへ。」

「可愛く言っても変わらないから……………」

「ナツ姉の物欲センサーは今日も絶好調だね……………」

姉弟水入らずの会話を眺めていたステイール達だが、モモミが思わず口を開けた。

「……ねえ、ちよつと気になったんだけど。動画でバトルしてた雰囲気と違うような気がするんだけど。」

「ナツカゼさん、普段はあんな感じで緩いし天然だからな。」

「こう言うのは悪いと思いますが、あのアマトさんやメイさんのお姉さんとは思えないです。」

「だろうな。」

ま、逆に言えばバトルで一度スイッチが入っちゃったら1番容赦ねえ人になるが……。」

ステイールが呟いた一言は誰の耳にも入らなかった。

「つまり、追加で買うかどうか悩んだのか。で、今までで何パック買ったの?」

「え、ええつと……。2——。」

(20か。)

「——250個。くらい?」

「想像の10倍超えてた!」

予想外の返答に思わずアマトは大声を上げた。

「よーし！　じゃあ私達に任せて！　ナツ姉が欲しいカード当ててみせるー！」

「言うと思っ——今『私達』って言ったか？　俺も買うのか!？」

「自慢のお姉ちゃんが困ってるんだよ！　こんな時に尻込みするなんて、それでも男なの!？」

「まだ『やらない』とは言っていないだろ！  
　　ったく、1つずつだけだからな。」

そう言ったアマトとメイはそれぞれパックを1つ買い、その場で開封した。

「…………。　お、やったー！　Xレアゲットオオ!!　見て見てナツ姉ー！」

「うーん。ゴメンねメイちゃん。持ってないけどそれは欲しいカードじゃないの。」

「ガーン!？」

　　どうやらメイが当てたカードはナツカゼが求めてた物ではなかったらしい。

「ア、アマ兄は…………?」

「——Mレアのブレイヴ、だな。それ以外にめぼしいカードは特には…………ナツ姉?」

「………………。　アー君それだよ。そのカードだよ！」



「はあっ!? コレだったの!?

た、確かに効果はナツ姉のデッキに相性は良さそうだけど……。」

アマトは手に持つカードとナツカゼを交互に見比べ――

「――ほら、ナツ姉。」

「……え?」

「欲しかったんでしょ。俺のデッキじゃあ使い切れない、ならナツ姉が使ってくれた方が俺も嬉しい。」

「あ、だったら私のも! このカードは軽減合わないから使わないし。」

「アー君。メイちゃん。ありがとう! お姉ちゃん感激だよ!」

感極まったナツカゼはアマトとメイからそれぞれカードを受け取る。

「あ、ナツカゼ! やつと見つけた!」

そこへ開放的な衣装を着た女性が現れる。

その女性を見たナツカゼは今思い出したかの様な顔になった。

「あ、リサっち! ゴメーン、欲しかったカードが当たるって知っちゃったから……つい。」

「もー。……って、あー!?! アマト君じゃん!?!」

「げっ……。」

リーシア久しぶり。……偶然つすね。」

アマトの顔が先程までとは一転して、明らかに『厄介な人と出会ってしまった。』と、読み取れる表情へと変わった。

「偶然じゃない！ ナツカゼを探してたら君とも出会うなんてこれはもう運命でしょ！」

と、言う訳でアマト君！」

「ヤだ。」

「2文字で断られたあぁッ!? ちょっと、まだアタシ内容話してないけど!?!」

「どうせ『うちのギルドに入らない?』、って言おうとしたんだろ?」

「流石アマト君、鋭い!」

「何百回も断ってんだからいい加減諦めてくれよ……。」

「つーかさそろそろ俺らの存在に気づけっつ!!」

全く触れられない事に流石に我慢出来なくなったのかステイールが叫んだ。



「どもども。ワタシは『風鈴華山』のギルマス、リーシア! で、こっちはウチのマブダチの——」

「ナツカゼです。アー君とメイちゃんのお姉ちゃんだよ。よろしくね。」

あの後カイトとモモミ、リーシアとナツカゼ。それぞれ初対面同士の自己紹介をしていた。

「始めましてカイトと言います。」

「モモモミです！ よよよよ、よろしくおねがいしましゅ！」

「アハハハツ、めっちゃ固くなってるじゃん！ そんな緊張しないで普段通りでだいじょーぶだから。なんならワタシの事は呼び捨てとか『リサ』とか『シア』でも好きに呼んでよ。」

（絶対無理！）

そもそも素人がBS・O内トップギルドのギルマスに実質ナンバー2の2人の前で緊張しないわけ無いでしょー！

リーシアは気楽に接してくるが、憧れの人物に会ったせいかモモミはガチガチに緊張していた。

「そーだ。アマト君達は何しにここへ来たの？ ワタシらと違って新エリア攻略の前調査って訳では無さそうだけど？」

「ああ。実はこの前のクエストで特別報酬があつて……。」

「『特別報酬!?!』」

『特別報酬』という言葉に興味を惹かれた2人がアマトの説明を食いつき気味で聞く。

「なるほど。要は短剣の正体を突き止める為にここに来たわけか。まっかせて！ ギルドメンバー全員に連絡して手がかりを探し出してあげるから！」

「いやリーシアさん。別ギルドの私達にそこまでする必要は——」

「気にしないでクシナちゃん。ギルマス権限で指示出すから問題ナシ！」

「権力悪用してんじゃねえ！ いいんすかなツカゼさん！」

「私は慣れちゃった♪」

「別に良いだろステイル。利用できるならさせて貰うさ。」

(この姉あつてこの弟かあ……。)

頭を抱えるステイル。その様子を笑顔でセラが見ていた。

「セラさん、何が面白いの？」

「ウフフ、こういう何気ない日常が楽しくて仕方ないの。メイちゃんもわかるでしょう？」

「大抵はステイルさんが困ったり酷い目に遭うんだけどね。」

「ね。」

「自覚ある上で実行するのが一番質悪いつてわかってんのかゴラアツ  
!!

あく疲れる……って、何だアレは？」

ツツコミ続けていたステイールがとある人集りを見つけ、9人はそこに足を進めた。

「——クソっ、負けちまったッ！」

「ふざけた言動の癖に割と手強い……。」

「ヒヤーツハツハツハツハ！ 負け惜しみとは醜い、醜いわ！」

人混みの中心で大声で叫ぶ男。その男を人混みの外から眺めてたモモミが引いていた。

「何よ、あの変な男。」

「わかるわその気持ち。まあゲームの中だとあんな感じの人、よく見かけるのよね。」

クシナもうんざりした様子で答える。そんな彼女達のことなど勿論気づいていない男は更に大声で喋った。

「へへッ！ さあて、次にバトルする奴はいるか!? この辺りでナンバーワンになるこの俺に挑む愚か者はいるのか!?!」

「二「じゃあ俺／私／私が、——あ。」」

「まくた面倒な事に首突っ込みやがって。しかも姉弟仲良く……。」

ステイールの視線の先には男の前にアマト、メイ、そしてナツカゼの3人が同時に並ぶ姿が映っていた。

「ナツ姉、メイ下がって。俺がやる。」

「えー、そこは年長者として年下に譲るもんでしょ！　だって最近アマ兄よくバトルしてんじゃん。」

「2人ともここはお姉ちゃんにやらせてよく。手に入れたカードを早速試したいし。」

「試運転の相手にすんのはいいけど、ナツ姉と戦うには荷が重いだろ、アイツ。」

「そんな事はあるけど、だって最近練習相手を探すのに苦労してるから……。」

「そもそもアマ兄はバトルしたい理由があるの？」

「単純にムカついたから。」

「それだったら譲ってよ！　私かナツ姉でボッコボコにするからいいでしょー！」

「さつきから黙って聞いてりゃあ好き勝手言ってるじゃねえぞお前ら！！」

男は叫ぶがアマト達には全く聞こえてないようで、誰がバトルするのか言い争っているままだった。

「——なあ、あの人『風鈴華山』のナツカゼじゃないか？」

「その横にいる奴は、『ACCESS』のリーダーのアマトか！」

「ちよつと待って。彼、さつき『ナツ姉』って言ってなかった?」

「え、ナツカゼさんの弟!?　じゃ、じゃああの女の子は末っ子なの?」

「いやいやいや、あのナツカゼさんに弟や妹がいるなんてファンクラブの間でも聞いた事ないぞ!!」

周りの人々がアマト達の姿を見てざわめきだす。

「チイツ、野次馬が次々と……。いや——

(待てよ。この大人数の中で勝利すれば俺の評判も更に上がる。しかも3人の内2人は知名度もありそうだ。なら——)  
いいだろう。お前らの挑戦を受けて……。」

「だ・か・ら俺がやる!」

「いや、私!」

「私に譲ってよ〜!」

「話聞けよ!!」

「はあ……。いい加減止めない?　一向に進展しないんだからもうジャンケンで決めたら?」

未だに口論を続けるアマト達を見て呆れたのかクシナが割り込んできた。

「……………。それもそうだな。」

「それじゃあ勝った人がバトルする権利を得る。で、大丈夫？」

「オツケー！ それじゃあ、うくらめっこ無しよ、ジャンケン——」



「ゲートオープン、界放ツ!!」

掛け声と共に、バトルフィールドに2人の影が現れる。

1人は先程まで野良バトルをしていた男。もう1人は——

「ヤッホー！ ナツ姉、アマ兄見てるー？」

『まさかメイが一発で単独勝ちするとはな。』

姉と兄を差し置きジャンケンに勝ったメイだった。

『ハイハイ見てる見てる。サツサと終わらせろ。』

『メイちゃん、ファイト〜！』

「ケツ！ いい気になりやがって。先攻は——」

「私から行くよ！ スタートステップッ！」

「ってオイッ!？」

男の言葉に耳を傾けず、メイの先攻でバトルが始まる。



「ドローステップッ！（手札4↓5）

メインステップッ！ 早速創界神ネクサス、『創界神ツクヨミ』を配置ッ！

（リザーブ4↓1 手札5↓4）

メイの背後に白と紫の独特な着物を着た青年の姿をした男が顕現する。

『グ、グランウォーカー!?!』

『ちよ、メイも創界神使いなの!?!』

『ん、言ってなかったっけ?』

『言っていないな。ついでだが俺もだ。』

『因みに私も。』

『右に同じく。』

『……ねえ、アタシの知り合い創界神持ち多くない?』

ステイルから順にナツカゼ、リーシアも創界神使いだと明かされモモミは戸惑ってしまう。

「同名のカードがフィールドにいないから配置時の神託<sup>コアチャージ</sup>発揮！」

ゴットシーカー おんみよくフリーリン

【コスト3 系統「妖戒」】  
鎧魂<sup>よろいだま</sup>

【コスト0 系統「魔影」】

ちようちんゴースト

【コスト0 系統「天渡」「妖戒」】

メイのデッキからトラッシュに置かれたカードは上の3枚だった。

「ツクヨミの神託対象はコスト0とコスト3以上の系統「妖戒」、「魔影」、「天渡」、「化神」を持つスピリット。今回は全部対象だから3チャージ！」

(ツクヨミ0↓3)

これでターンエンド！」

「創界神使いだったか。いいカモだぜ！」

男はメイのツクヨミを見て驚くどころか、笑みを浮かべていた。

「スタートステップ。

コアステップ。(リザーブ4↓5)

ドローステップ。(手札4↓5)

メインステップ。『光の衛士アドリアン』を召喚！

(リザーブ5↓3 手札5↓4)

光の衛士アドリアン

【レベル1 BP2000 コア1「ソウルコア」】

男のフィールドに青色の体の巨人が現れる。

『<sup>チャージ</sup>強化』を持つスピリット。随分古いカードを使ってるのか。』

「まだいくぜ。『光の衛士アドリアン』をもう1体召喚！

(リザーブ3↓2 手札4↓3)

更に、『光の戦士ガイウス』も召喚する！

(リザーブ2↓1 手札3↓2)

光の衛士アドリアン

【レベル1 BP2000 コア1】

光の戦士ガイウス

【レベル1 BP3000 コア1】

「そしてバーストをセットし、ターンエンドだ！

(手札2↓1)」

男は2体目のアドリアンと青い槍と盾を持つガイウスを続けて召喚し、バーストも構えてターンを終えた。

「創界神ネクサスは自らの効果でデッキを減らす。わざわざデッキアウトを狙うこっちの手間が省けて助かるぜ。」

「フーンだ。デッキアウトなんか怖くないもんね！ スタートステツプ！」

コアステツプ！（リザーブ1↓2）

ドローステツプ！（手札4↓5）

リフレッシュステツプ！（リザーブ2↓5）

メインステツプ！ 『十式戦鬼・断蔵』ちゃんをレベル2で召喚！

(リザーブ5↓3 手札5↓4)

十式戦鬼・断蔵

【レベル2 BP3000 コア2】

『『『あつ。』』』』

メイのフィールドに紫色の忍び衣装のスピリットが召喚される。それを見たステイル、クシナ、セラ、リーシアの4人は同じ事を考

えた。

……このバトル、終わったな。

——と。

「断蔵ちゃんレベル2の効果！ 私のライフを1つ、断蔵ちゃんにあげる。——ッ!!」

(ライフ5↓4 断蔵2↓3)

断蔵が鎖鎌を取り出し、メイのライフをその鎌で刈り取った。

「なッ、自らライフを?!」

「これでこのメインステップの間、断蔵ちゃんは黄色のシンボルが2つ追加されるんだ！

そして断蔵ちゃんのレベルを下げて、『座敷ガール(RV)』ちゃんをレベル2で召喚！

(リザーブ3↓2 手札4↓3 断蔵3↓1)

座敷ガール (RV)

【レベル2 BP3000 コア2 「ソウルコア」】

十式戦鬼・断蔵

【レベル1 BP2000 コア1】

次にメイは黄色の着物を着た可愛らしい少女を召喚する。

「コスト3の系統「妖戒」を持つてる座敷ガールちゃんが召喚されたからツクヨミに神託！

(ツクヨミ3↓4)

次は『ヌリカベ (RV)』ちゃん。出ておいで！

(リザーブ2↓1 手札3↓2)」

ヌリカベ (RV)

【レベル1 BP6000 コア1】

白い体毛に覆われた犬に似たスピリットが現れる。すると、ヌリカベの召喚が引き金となり、先に召喚されていた座敷ガールの効果が発動する。

「座敷ガールちゃんのレベル2の効果！ 効果を持っていない自分のスピリットが召喚された時、自分のライフが5以下ならライフを1つ回復する！ だから私のライフは5になるよ！

(ライフ4↓5)

更に座敷ガールちゃんのもう1つの効果！ 座敷ガールちゃんにソウルコアが置かれてる時に系統「魔影」、「妖戒」を持つ自分のスピリットが召喚された時、デッキから1枚ドロォーしまーす！ そしてツクヨミも神託発揮！

(手札2↓3 ツクヨミ4↓5)

最後に座敷ガールちゃんのレベルを1に下げて、『十式戦鬼・死鬼若丸』ちゃんを召喚ッ！

(リザーブ1↓0 手札3↓2 座敷ガール (RV) 2↓1)」

十式戦鬼・死鬼若丸

【レベル1 BP2000 コア1】

座敷ガール (RV)

【レベル1 BP2000 コア1 「ソウルコア」】

メイは4体目のスピリット、落ち武者のような灰色の武士を召喚する。

「座敷ガールちゃんの効果でワンドローと、ツクヨミに神託。

(手札2↓3 ツクヨミ5↓6)

それじゃあアタックステップ、行つくぞー!!

最初はヌリカベちゃん! ゴー!」

メイの指示に従い、ヌリカベが走り出す。

「ライフで受ける! グッツ!!

(ライフ5↓4)」

「次は断蔵ちゃん、アタックだよ!」

「ッ! ガイウス、ブロックしろ!」

断蔵は素早く移動し男のライフを狙おうとするが、進路をガイウスに阻まれてしまい、そのまま槍で突き刺されてしまった。

「むうっ。座敷ガールちゃん、行って!」

「またアタックか! アドリアンでブロックッ!」

手まりを持ちながら走る座敷ガール。そんな彼女をアドリアンは手持ちの槍で弾き飛ばす。だがやられる直前に座敷ガールは持っていた手まりをアドリアンに投げつける。その手まりはアドリアンの頭部へ見事にクリティカルヒットし相打ちとなった。

「まだまだッ! 死鬼若丸ちゃんであタックッ!」

死鬼若丸が刀を引き抜く。しかし、何故か死鬼若丸はその刀をメイへ向けた。

「死鬼若丸ちゃんのアタック時効果！ 私のライフを1つ死鬼若丸へ渡す事で、トラッシュユからコスト3以下の系統「魔影」、「妖戒」を持つてるスピリットをノーコスト召喚できる！」

私はトラッシュユから『ゴットシーカー おんみよくフリーン』ちゃんを召喚！

(ライフ5↓4)

死鬼若丸がメイのライフを刀で切り裂き、そのライフの欠片に呪術を込める。すると欠片は黄色のシンボルへと変わり、陰陽師の服を着た黄色のためきが現れた。

ゴットシーカー おんみよくフリーン

【レベル1 BP2000 コア1】

「更に、私のフィールドに黄色のシンボルがあるから【連鎖】ラッシュ発揮ッ！ 自分のライフが5以下の時、トラッシュユのソウルコア以外のコア1つをライフに置くよ！」

(トラッシュユ2↓1 ライフ4↓5)

次に、おんみよくフリーンちゃんが召喚された事でツクヨミに神託グランフィールドと神域ドが発動！ 自分の効果でスピリットが召喚された時、相手のスピリットのコアを1つをリザーブに送れる。よってアドリアンのコアをリザーブにシユート！

(ツクヨミ6↓7 アドリアン1↓0)

ツクヨミが印を結ぶとアドリアンの周囲が紫色の霧に覆われる。その霧に包まれたアドリアンは悶え苦しみながら消えてしまった。

「そしておんみよくフリーンちゃんの召喚時効果発揮！ 私のデッキを上から3枚オープン！」

おんみよくフリーンが呪符を掲げるとメイのデッキから以下の3

枚がめくられた。

創界神ツクヨミ

「創界神・アマハラ」

ろくろネツクガール

「妖戒」

カシャネコ (RV)

「天渡・家臣・妖戒」

「オープンされたカードからツクヨミと系統「天渡」、「化神」を持つ紫か黄色のカードを手札に加える。今回は2枚目のツクヨミとカシャネコちゃんを手札に、残ったカードはトラッシュユヘ！  
(手札3↓5)」

死鬼若丸のアタックによって1度にスピリットの蘇生、手札補充、相手スピリットの除去を次々で行った。しかし、男も黙って見ている真似はしなかった。

「お前のスピリットが召喚時効果を使った事でバースト発動だああツツ!!」

男が叫ぶと同時に伏せられていたカードが開かれる。そのカードの名は『鉄の霸王サイゴード・ゴレム (RV)』。

「バースト効果でお前のデッキを上から5枚。更にガイウスの【強化】が加わり+1。合計6枚破棄だ！」

「うわああアア!!」

鎧式鬼「コスト3」

ツクヨミの陰陽神殿「コスト4」



十王ヘンジョウ「コスト4」

ちようちんゴースト「コスト0」

吹雪ガール「コスト2」

鎧魂「コスト0」

メイのデッキから6枚のカードが破棄された。その中にあるカードを見た男はニヤリと笑った。

「破棄されたカードの中にコスト4のカードアリ！ これで召喚できるぜ！ 俺のキースピリット、全てを砕く鋼の王！ 『鉄の霸王サイゴード・ゴレム』 ツツ!!  
(リザーブ4↓0)」

青い光と共に大地から全身鋼鉄に覆われた巨人が出現した。

鉄の霸王サイゴード・ゴレム (RV)

【レベル2 BP11000 コア4 「ソウルコア」】

『ヤバ!? リバイバルのサイゴード・ゴレムってちよーレアカードじゃん!』

「わざわざ俺のキースピリットを出してくれてありがとうよ！ 礼に次のターンで王手を決めてやる!」

「ま、次のターン来るといいけどね。」

「——何?」

「それじゃあ死鬼若丸ちゃん、メインのアタックだよ!」

刀を構え死鬼若丸は敵陣へと攻める。しかし男は死鬼若丸よりも

メイの言葉に気が向いていた。

「(何だ。この感じは。あいつ、一体どういう意図でさっきの言葉を……)」

——ツツ?!」

男が気付いた時には死鬼若丸は既に刀を振り下ろそうとしていた。

「ライフだ!! ——ツツ!

(ライフ4↓3)」

咄嗟にアタックをライフで受けるが、それを待っていたかのようにメ  
イが大声をあげる。

「貰った! 系統「魔影」か「妖戒」を持つ自分のスピリットが相手の  
ライフを減らしたバトル後に、このカードをノーコスト召喚!  
来て! ツクヨミの黄色の半身!!」

ツクヨミの身体から黄色のシンボルが飛び出す。それと同時に、メ  
イの服装が黄の和服へと変わった。

「妖戒の帝みかどにして百鬼夜行を率いるリーダー! その名も化神スピ  
リット、『妖戒帝エンオウ』ツツ!!!」  
(リザーブ2↓1 手札5↓4)

黄色のシンボルが砕け散り、青い着物を着た人型のスピリットが顕  
現する。

妖戒帝エンオウ

【レベル1 B P 3000 コア1 「ソウルコア」】

「ま、まだ出てくるのか?！」

「対象が召喚されたからツクヨミに神託。

(ツクヨミ7↓8)

更に神域! 今度はガイウスのコアをリザーブに。バイバーイ。

(ガイウス1↓0)」

再びツクヨミが呪術を使用し、ガイウスも紫の霧で消滅した。

「そしてエンオウの召喚時効果、『天界放』ツツ!!

ツクヨミのコアを1つエンオウに渡す事で、このターン、相手スピリット1体をブロックできなくする! という訳で、サイゴード・ゴレムお休みなさ〜い。

(ツクヨミ8↓7 エンオウ1↓2)」

妖戒帝エンオウ

【レベル2 BP6000 コア2「ソウルコア」】

エンオウは刀を引き抜き、そのまま横一線に振るうと黄色の衝撃波が放たれる。その衝撃波はサイゴード・ゴレムへと直撃し不可思議な力で押さえつけられてしまう。これによって男を守るスピリットは実質いなくなってしまった。

「仕上げいくよ! おんみよ〜フリーリンちゃんであタック!」

「クソが、いい気になりやがって!」

フラッシュタイミング、『絶甲氷盾』ツ! このバトルが終わった時、アタックスステップは終了する! コアはサイゴード・ゴレムから確保!

(リザーブ1↓0 手札1↓0 サイゴード・ゴレム4↓1)」

鉄の霸王サイゴード・ゴレム (RV)

【レベル1 BP6000 コア1「ソウルコア」】

メイのフィールドが氷に覆われる。このままでは強制的にアタックステップを止められてしまう。しかし――

「せっかく使ったそのマジック、無駄になっちゃうね。

フラッシュユタイミング！ ツクヨミの神グランスキル技発揮！ ツクヨミのコアを6つボイドに送って、私のトラッシュユから系統「魔影」、「妖戒」を持つてるスピリットをコスト合計4まで好きなだけ召喚する！

(ツクヨミ7→1)

まずはコスト0の『ちようちんゴースト』ちゃん！

(リザーブ1→0)

次もコスト0の『ちようちんゴースト』ちゃん！ コアはエンオウから。

(エンオウ2→1)

そして最後はコスト4の『十王ヘンジョウ』ちゃんをレベル2で召喚！ ヌリカベちゃん、死鬼若丸ちゃん、今までありがとう。

(ヌリカベ1→0 死鬼若丸1→0)「

ツクヨミが別の呪術を使用すると赤い提灯に目玉と口がついたお化けの様なスピリットが2体、紫色の大きな角が生えた男性のスピリットがトラッシュユから蘇る。

ちようちんゴースト

【レベル1 BP10000 コア1】

ちようちんゴースト

【レベル1 BP10000 コア1】

十王ヘンジョウ

【レベル2 BP40000 コア2】

「ア、アタックスステップが終了するのに召喚する意味が——」

「あるよ！　ヘンジヨウちゃんレベル2の効果！　系統「魔影」、「妖戒」を持つ自分のスピリットがアタックしている間、相手は効果でアタックスステップを止める事はできなくなるからね！」

「なッ?!」

ヘンジヨウが右の人差し指で五芒星を生み出すとメイのフィールドを覆っていた氷が溶け始めた。それはつまり、先程の絶甲氷盾の効果は無効になったという訳だ。

そして動けないサイゴード・ゴレムの横を通り過ぎ、おんみよくフリーリンが男の元まで辿り着く。

「ラ、ライフ——あグウツ！」

(ライフ3↓2)

「私達のアタックは止められないよ！　次はヘンジヨウちゃん！」

「ライ、がああつ!!」

(ライフ2↓1)

男の宣言を待たず、ヘンジヨウは複数の光弾を操りその全てをぶつけた。

「ラスト行くよー!!　妖戒帝、エンオウでアタックウツ!!」

華麗に宙を舞い、エンオウは男の直ぐ側まで近づき刀の切っ先を男へ向けた。

「ひいいつ、来るな！　来るなああッツ！」

ギイヤアアアアアアアアアツツ!!

(ライフ1→0)

あらゆる手段でも止めることができず、次々と蘇るスピリット達の連続アタックが男を錯乱状態へと陥らせる。そんな男へエンオウは無慈悲にも最後のライフを断ち切るのだった。



「イエーイ、勝利のVサイン！」

「キヤーー！ メイちゃんってば相変わらずのスピード決着ね！」

バトルフィールドから戻ってきたメイをセラが出迎える。その後ろにはメイに負けた男が放心状態で倒れていた。

「な、なんだよ……アレは……。」

「さて、次に戦うのは俺だが。」

「……………え？」

声のした方へ男が視線を向けると、そこにはアマトとナツカゼが立っていた。どうやら2人ともバトルをする気満々のようで、アマトは男を鋭い目で見下し、反対にナツカゼは優しそうな笑みを浮かべながら見ていた。

「た、た、助けてくれえええ!!!」

しかし、今の男にはナツカゼの笑顔ですら言いよの無い恐怖を感じたようで一目散に逃げだした。

「逃げ足早いなアイツ……。」

「うー、せっかく相手になってくれると思ったのに。」

「仕方ない。ナツ姉、俺で良いなら相手になるよ。」

「え、ホント!? ありがと〜!」

「って事で情報収集は任せた、ステイール。」

「面倒な事押し付けてんじゃねえ」「ゲートオープン、界放ツツ!!」「——っってもう始めやがった!」

ステイールの反論を完全に無視して勝手にバトルフィールドへ移動したアマトとナツカゼ。2人がいなくなった場所を呆然と眺めていたステイールの腕をセラが絡め取った。

「姉弟水入らずのバトルなんだし、わたし達で情報見つけて恩を売りましょう。ね、ステイール君♪」

「あ、オイ! 腕離せ、腹黒女! 周りに見られて——胸押し付けてくんじゃねえ!! 離せええええ!!」

「おろ? 何か面白そうだし、ワタシらもついてこー!」

「リサさん名案! 私も行きまーす!」

「あの、アマトさん達は?」

「アマトとナツカゼさんは私が見ておくから気にしないで。」

「サンキュー、クシナちゃん！ それじゃあレッツゴー！」

「ちよちよちよ、待ってよー！」

ステイールとセラの後を追い、メイ、カイト、モモミ、リーシアの4人が走り始めた。

「——アマハラ、姉弟……。」

メイのバトルを見ていた1人の観客がそう呟いた。

誰も気に留めなかったが、その言葉はしばらくしてから有名になっていくのだった。